

天地間の事だから、いつ何物が、何れより來つて何れへ走り去るか知れたものではない、現にこの伊吹山にも相當の飛禽走獸がゐるに相違ない、猛禽はさいぜん、子を索め得て、遙かに古巢をさして舞ひ戻つたが、その外に地を走る狐兔、鼠の輩もゐない筈はない、それ等のものが深夜、軒を走つたからと云つて、さのみ驚くには當らないでせう、だがまた、不意に走つて人を驚かすものは、空中の鳥類や地上の走獸とのみ限つたわけのものではない、天空を見れば、不意に星の走ることがある。

流星或は「抜け星」と云つて、その地球全面に現はれる類でさへも、一晝夜に一千萬乃至二千萬に及ぶとの事だから、それを一々驚歎してゐた日には際限のない事です。

併し、いづれにしても、それは飛ぶべきものが飛び、走るべきものが走つたのであつて、そちらは天上、空中、野外、時としては軒をかすめて飛ぶ事はあつても、こちらは、木處水上以來、何千年の經驗を積んで、さうして構へ上げた人間の住居の中にとどまつてゐるのだから、さう慌しく驚起しなればならない筈のものではないのです、まして、宇治山田の米友ほどの剛の者が、俄然として驚き醒めねばならぬほどの、非常なる産物ではありません。

ません。

そこで、また當然、米友が俄然として驚き醒めたといふことの裏には、走るべからざるものがあつて、この軒下を走つたといふ第六感か七感か知らないが、それに働きかけられた爲に起つたのです、斯くて俄然として驚きさめると共に、その眼は例の如く、その手は早くも杖槍の一端にかゝつて、戸外の軒の下の方に注ぎました。

戸外の軒と云つても、それは、さき程、米友が自己陶醉を演じた松の太木の根の下の芝生の方向ではないのです、それとは全く反對の伊吹山の山腹に向つての方の裏手の一方でありました。

遂に、米友が、爐邊を立ち上がりました、無論、たゞ、俄然として驚き醒めただけでは安心が成り難いから、それで卒然として立ち上つたものですから、その手に、例の唯一の獲物を放すことはありません。

流しもの引窓の處まで行つて、米友は、そつと窓を引いて外を見ました、引窓を引くといつても、これは南方十字兵衛があやつたやうな通常屋根の上に取りつけて、下から

繩で引いて息抜きをする處の引窓ではなく、壁の一部を打ちぬいて、それに小割板を二重に取りつけ、べつかつ、こうの形にして、引けば開く押せば閉づるだけの單純な仕組、大工さんのテクニクで云へば無雙窓、委しくは無雙連子窓といふあれなんです、風を避ける爲には、通常その外側の方へ障子紙を張つて、單に明り取りだけの用に供してゐるが、ここでは、まだ紙を張つてしまふほどの時間が無かつた爲に、明戸あきどになつてゐることを心得てゐたから、米友が、そつと引き開けて、外をのぞいて見たのです、引き明けて見て、外が月の夜であることを知りました。

月の夜と云つても、この巻の初めの名に冑す處の「新月」の夜ではありません、三日月の晩でもなかつたのです、當代のある人氣作者が、東の空を見ると三日月が上つてゐたとか、かみなかつたとか書いたさうだが、新月とか、三日月とかいふのは、どう間違つても東の空には現はれないものなのです、少くとも此の日本の國土で見得る地點に於ては。

ですから、此の深夜に、窓を推すと、颯と野外に流るゝ月の色は、新月でも三日月でも無いには定まつてゐる、では、何月の何日の何時何刻の月かと、たづねられると、正直な

米友が、きつと狼狽して、吃り出すに相違ない。

ですから、此處の處は、さう正直な人間を追究しないで置いて、單に、窓を推して見ると、伊吹の山村は一帶に水の如き月色が流れてゐるといふことで不詳していただきます。

もとより、連子形の飛びくの空間から、視野を恣しにするわけには行きませんが、さつと窓を開いて、さうして、流れ渡る月光の外野を見ると、特に何物をか、しかと認め得たといふわけではありませんが、何となく、いよゝ米友をして安心せしめざる處のものがある。

そこで、また眼をこすつて、いきなり立ち戻つて今度は、裏口の、つまり、その家から云へば非常口と云つた方面です、そこに一間間だけの戸があつて、心張棒で塞いである、その心張棒を米友が外しにかゝりました、心張棒を外から外すことは、かなり難儀な仕事だが、内から外す分には何の事はないのです。

それを外して、戸をがらりと開けて見ました、これは連子窓から見た棒編形の世界とは違つて、伊吹のスロープを充分に視野に取り入れて、さうして、眼近くは、この家の軒下

をずつと見通し——果して、その軒下の南へ廻る角の處に、怪しい者の姿を米友がしかと認めて、思はず力足、例のちだんだの一種類ですが、こゝは板の間の上ですから、地だんだとは云へない、床だんだとか、木だんだとかいふのが正當かも知れないですが、
「曲者くせもの見つけた！」

と云ふやうな氣合で、米友が小躍りして見たのですが、その見つけられた怪しい者は米友が動いたほどには動きませんでしたけれども、それでも、誰かに見咎められたと感づいたものか、靜かに軒をめぐつて、姿を隠してしまひました、それは尋常の者ならば、認めきれないほどの、かはし方でありましたけれど、相手は宇治山田の米友でした。

彼は、それだけで、たしかに、此の家の外に今まで立つてゐた人がある、さうして、この軒下、雨だれ傳ひに、すうーつと走つて行つたことも確かである、どの地點に何時間立つてゐたか、或ひは、こゝまで新參早々で、軒下を走つたものだけ、その邊は明瞭しないが、たしかに此の家のまはりを、うろつく人影があつた事を、米友は確實に感づいたのみではない、確實に認めたのだから猶豫ゆっよはなりません。

と云つて、こゝから直接に飛び出すのは無謀です、第一、地の利もよく無い上に、履物はきものがないのです、さすがに武術の心得があるだけに米友は、地の利と足場とを無視してかゝるやうな無茶な振舞はしない、いかに心は慌てゝも。

飛び出すにしても、草履はらを履かなければならぬと考へました、考へると共に、こゝには草履が無い、表口まで行かなければ、それを足にすることは出来ないと思ひました、併し此の家の構に於ては表も裏も、さう近い距離では、米友の身體で、一つ飛びに飛びさへすれば、裏は直ちに表になり表は直ちに裏返すこと出来るのですから始末はいゝのです、それと、なほ都合のよい事は、只今確認したその怪しの者の人影——たしかに人間の影法師には相違ないが、それが何者であつて何にしに來たかといふことまでは確認してゐないのですが、それが人間の物影であることだけは確實に認めたし、苟も人間の物影である以上、深夜この邊の、而も我々の新に移り住んでゐることを知らない筈のない怪しい奴が忍び寄つてゐると、斯う断定しないわけには行きません——その怪しい奴も、やつぱり、軒を南へ廻り込んだのだから、當然、自分が履物を求めようとする裏口の方へと姿を移したの

です、して見ると、自分が表口へ飛びうつて、履物を突かけてあちらから外へ飛び出すと、却つて幸に、その怪しい奴と鉢合せをするかも知れない——得たり賢しと米友が、その通り實行を試みました。

前庭の方、即ち、鶯の子を解放して、親鸞を喜ばせてやつたり、その揚句、いゝ氣持になつて川中島の二の舞に陶醉したりなんぞして、さて家の中へ舞ひ戻らうとした途端の鼻を、ギョツと白まされたあの剃刀使ひ、要するに、あの戸口の戸を、もう一度また内からからりと開けて、さうして、米友が身構へ充分に、矢庭に廣庭へと躍り出した途端、果して鉢合せ、

「友さん」

「お前」

果然、そこで鉢合せが起つてしまいました、而も、鉢合せをした當人よりも、合はされた米友公が、またしても泡を食はされてしまつたのは返すくも、今晚は、米友の賣れな晩であるらしい。

「友さん」

と云つて、出合頭にそこに立つてゐたのは即ち、最初から米友が咎めきつてゐた怪しい物影、人間であるには相違ないが、その家の周圍をうろつき、軒下を走り、或は塀の下にイんで、ためつすがめつしてゐた事らしい證據の充分にある、その怪しい奴から先を取られて聲をかけられてしまいました。

さうして、米友が「お前」と云つたきり立ちすくみになつたのは、豫期したとは全く番狂はせの立合であつたからの事で、即ち、この怪しい人影はお銀さまであつたのです、さうして、怪しい人影の怪しい事を睨んだ點に於ては聊かも誤認はなかつたけれど、まさかお銀様であらうことを、米友が睨み足りなかつた事に起つた此の場の番狂はせ——」

三十一

「友さん、入つてもいゝ？」

とお銀様から云はれて、米友が、

と答へざるを得ませんでした。

米友としては完全なる拍子抜けです、拍子抜けと云ふよりも力負なんぞせう、立合ひで云へば全く氣合を抜かれてしまったのですから、技も力も施す術がないので、相手にイナされようとも、突き出されようとも御意のまゝなのです。

そこで、當然、お銀様が米友をリードしてしまつて、進んで、例の戸口から、この家中へ大手を振つて——暴君とは云ひながら女の事ですから、形式に於て大手を振るやうな振舞ひは無かつたけれども、ずつと其の昔、本所の彌勒寺長屋で米友から、嚴しい咎め立てを蒙りながら、遂に屈することを爲さなかつた、覆面のまゝ人の座敷へ進入する、その傲慢無作法だけは今晚も改めないで——ずつと座敷へ、以前、お雪ちゃんも坐り、奇怪千萬な剃刀の使ひ手も坐り、現在は米友が快く夜船を漕いでゐた當時の、爐邊へ来て、然るべき處へお銀様が、米友に先立つて、座を占めてしまひました。

おぞましくも、米友はそれにリードされたのみならず、彌勒寺長屋の時のやうに、たんか

をきつて、それを咎め立てすることをさへ爲し得ず、唯々として、お銀様に導かれて、自分も、最前の夜船の座に直りました。

これは、いかに米友理窟を以てしても、ちよつと文句がつけられないのです、と云ふのは、傲慢であらうとも、無作法であらうとも、こゝに鎮座し給ふ覆面の女將軍は、まがふ方なき此の地方の新領主であることを、米友の理性が許してゐるから、自然、この家の軒下であらうとも、縁の下であらうとも、籠の下であらうとも、此の女人の王土のうちでないといふことは云へない、して見れば晴天であらうとも、深夜であらうとも、王者が王土に親臨し給ふことに於ては文句がつけられない、我々は、たとひ王臣といふものでないとしても、その王土の中の一種のかゝり人なのだ。

さういふ理解の下に、多分、米友はその王者の傲慢無作法を許してゐたのだらうと思はれます。

「友さん、今晚、わたしを此家へ泊めて頂戴な」

充分に座が定まつてから、女王の第二段の勅命がこれでありました。

「うむ——」

と米友が唸りました、唸つたのは返事なのです、返事であるが、是とも非ともいふ意味はその中に含まれてゐない、それは、やつぱり米友の頭で、是とも否とも含ましむるだけの意味を見出せなかつたからでせう、何となれば、現に王土であり王物であることを認する以上は、泊めて呉れも、泊めて呉れないもあつたものではない、自分の家で自分が勝手に手足を延すべき事を、支へん様はないと観念してゐるからでせう、さうすると、第三段になつて女王の仰せには、

「よければあの奥の間へ泊めて頂戴な」

「あの奥の間——」

と云つて、米友が鉛丸を飲まされたやうに眼を丸くせざるを得ませんでした。こゝに至つて、今まで忘れてゐたやうに奥の間の事までが、ハッキリと米友の頭に再び

うつゝて來ました。

三十二

「いけないの、いけないければ頼みません」

とお銀様がキツバリ云ひました。

「うむ、そいつは、よした方が宜からう」

とこゝで米友が、はじめて内容のある言葉を發しました。」

「ちや、よませう」

とお銀様が立どころに相應しました。

「よした方がいゝ」

米友も顔として下りませんでした。

「よします、お前さんが、いけないと云ふものを強ひてお頼みはしません」

「うむ」

「ちや、米友さん、こゝへ泊めて頂戴」

「うむ」

「いゝの」

「うむ」

「こゝならいゝの」

「うむ」

「奥の間では、いけないけれども、こゝへなら泊めて下さるの」
「うむ」

「まあ、有難う、では、こゝへ泊めていただくことにして……」

お銀様は、覆面の中から米友の面を、まに見つめました、睨むのと同様です、さすがの米友も、眞向きに見られて、まぶしいやうな、テレ臭いやうな、小癩にさはるやうな氣分に迫られたけれど、どうも、今晚は、今晚だけではないが、此の女に對しては、さうボンボン啖阿がきれないので、と云つても、それはお角さんに對する時のやうに、妙にすくんだ高壓されるやうな意氣込で、たんかがきれないのでなく、この女王に對しては、何

とも云へない、一種の親しみを、感ずるやうな點から、米友がテキパキと、そつけなく、片づけきれない何物かあるのです。」

「ねえ、友さん」

「うむ」

「ぢや、もう一つ頼みがあります、聞いて下さる？」

「うむ——」

頼み、頼みと、言葉だけはしほらしいものだけれども、この頼みといふ奴が、なまやさしいものではないことを、米友はよく呑込んでゐる、併し、かりにも頼み——と云はれて見れば「おれも男だ」といふ緩急心が湧き出さない限りもあるまい。

「あゝ、よかつた、友さんが、わたしの第二の頼みを聞いて呉れました」

斯う云つて、お銀様は、凱歌を上げるやうな、あざ笑ひをするやうな獨斷を試みたので、米友が狼狽しました。

「まだ、聞いたとも聞かねえとも云やしねんだ、一てえ、その頼みと云ふのは、何なんだエ」

こゝで、あぶなく、食ひとめて、駄目を押したのですが、お銀様は猶豫なく、覆面の首を横に振りました。

「いけません、もう遅いですよ、黙つてゐたのは承知のしるしなんですからね」

いかにも黙許とか黙諾とかいふ不文律はあるにはあるけれど、それを此の場合、米友に向つて強壓的に、はめ込まうとするお銀様の了見方がわからない。

「ちえッ」

と米友が舌打ちをしましたけれど、一向ひるまないお銀様には、薪を加へたやうにも、油が乗つて来たやうにも見受られ、

「もう許しません、一旦、お前は承知をしたのだから」

「承知をするにもしねえにも、頼まれる事柄そのものが、まだわかつちやるねえぢやねえか」

「お前には、わからなくても、こちらにはわかつてゐます、さうして、たつた今の先き、お前から充分に無言の承諾を得てゐますからね」

「馬鹿にしなさんな」

通例は、

「馬鹿にしてやがら」と云ふべき處を、相手が相手のせい、米友としては、「馬鹿にしてやがら」が「しなさんな」にまで緩和されて來ました。

「男らしくもない」

とお銀様が、横目で睨む。

「何が」

「何がつて」

「何がどうして」

「何がどうしたつて、男らしくも無い」

「何がどうして、おいらが男らしく無えんだ」

「だって、一旦、承知をして置きながら」

「一旦、承知、何を」

「奥の間がいけないから、此處へ泊めて呉れることを……」

「そりや、お前の勝手だよ、泊まらうと泊まるまいと、本来お前の持物なんだ、おいらの承知も何もあつたものぢやあ無え」

「でも、米友さんが留守居をしてゐる以上は、米友さんの許しを得なければなりませんまい、まあそれはどうでもいゝとして、第二のお頼みも承知して呉れた辯に」

「それだ——その第二の頼みといふ奴がわからねえんだ、おいらの方では、うやむやなんだ、お前の方だけで、ひとり合點をしてゐるんだ」

「そんな事を云つても、もう駄目よ、黙つてゐる事に、友さんは充分、わたしに好意を持つて、わたしの頼みなら何でも聞いて呉れる心持を充分持ちながら、生返事をしたんだから、わたしとしては、立派に友さんを承知させてしまつたと受取つてゐるのよ、それを今になつて、兎や角云ふなんて、友さんらしくもない、男らしくも無い、女の腐つたやうだ」

「こりや、手殿しい！」
と米友が眼を圓くしながら、

「そりや、おいらだつて、頼まれりや、男と見込まれなくつたつて、していゝ仕事ならすらあな、ましてお前とおいらの仲は他人ぢやあ無え」

「まあ嬉しい」

お銀様の聲に異様な昂奮のひらめきがありました。

「わたしと、友さんと他人で無いと云つて呉れましたわね」

「そりや、お前は、どう受取つたか知れねえが、此の土地も此の家も、皆んなお前が正當の代價を拂つて買ひ受けたものだらう、その領分の中に假りにも、斯うやつて、衣食住を受けてゐりや、主と家來——と云はねえまでも同じやうなものだあな」

「ほんとに嬉しい、友さんの心意氣が何といふ嬉しい事でせう、では、友さん、お前は、わたしの家來なんだね」

「まだ、家來といふわけぢやねえが、どつちかと云へば、頼まれて來た客分のやうなものなんだが、でも、世話になつてゐる以上は、お前を主と見て、するだけの事をするのが當然の態度なんだ」

「まあ、なんて、可愛らしい事を云ふんでせう、では何にしても、友さんは、わたしの家
來、わたしは、友さんの主人なのね」

「當座は、そんなやうなわけなんだ」

「では、友さん、今までは頼みでしたけれど、今度は命令になつてかまひませんね」

「そりや——」

「もし、一家の主人の命令が、家來に届かないとすればその家は成り立ちません」

「理窟はさうだ」

「一國の領主の命令が、領内の民に受入れられなければ一國は成り立ちません」

「理窟はさうだ」

「では、友さん、今、お前が、うやむやにした第二のわたしの頼みといふものを、思ひ切つて
わたしは命令の形式でお前に申渡すわ、それなら否の應のはありますまい」

「ちえッ、諄いな」

「諄く云ひたくないけれど、お前がわからな過ぎるからよ」

「わからねえ、わからねえのが當り前だ」

「では、改めて、わたし、はつきりと第二のお頼みを——いゝえお頼みではない、命令の
形式で、友さんに申渡します」

「ちえッ」

「否とは云はせません」

「ちえッ」

「まあそんなに意氣張らなくてもいゝわ、もう、好意ある黙諾を受けてゐる事を、かりに
形式で申渡すだけなんだから」

「ちえッ」

「ねえ、友さん」

「何だ」

「お前、今晚、こゝで、わたしと一緒に寝ない？」

「エッ！」



二〇九



二〇八

宇治山田の米友が此の時ばかりは飛丸に胸を打ち貫かれたやうに絶叫しました。

三十三

「もう聞きません、女から男への頼み、主から家來への命令、この二つの掟を破れるものなら破つてごらん」

とお銀様は灼熱の銀を米友に向つてグイ／＼と押し當てる。

「馬鹿にするな」

坐りながら、米友がタヂ／＼と座を下つて行きました。

「どこから行つても許しません、それよりも、友さん、お前は今晚、こゝで、わたしと主諸に寝て悪いといふ證據があるのですが」

「馬鹿にするな」

「馬鹿にするどころですか、わたしは、今晚に限つて友さんが可愛くてたまらないのよ、ねえ、怒らないで考へてごらんさい、友さん、お前にはお妻さんは無いでせう」

「馬鹿にするな、こん畜生！」

「怒らないでさ、お前さんにお妻さんが無いやうに、わたしにも御享主といふものはありません、ですから、二人が、此處で一緒に寝ようとも起きようとも誰れが咎める者がありませんせう」

「馬鹿にするなよ、この阿魔！」

「馬鹿になんそしちやるませんよ、それからねえ、友さん、お前さんだつて、男でせう、わたしだつてこれでも女の端くれなのよ、女が男に惚れておかしいといふ事がありますか、男と女とは、許すものゝやうに出來てゐるのが本當で、許されないといふのは、神代からの掟ではないのです」

「ふざけるな！ いゝ加減にしろ」

「何がふざけるのですか、友さん、御覽なさい、あの奥の間で、二人の仲のよい事、あれは何ですか、一方が眼が見えようとも見えまいとも男は男に相違ない、一方は、まだ世間知らずとはいひながら、油断のならない、小娘だつて女のうちやありませんか、その

男と女の二人があゝして、仲よく奥の一間にあるのを、友さんは何とも驚きもしない、咎めもしないで、おとなしく張番をしてゐながら、それと同じ事を云ひ出したわたしを、畜生だの、阿魔だの、くたばれだのと悪口雑言をなさるのがわからないぢやありませんか——わたしと寝るのがいやならば、あの奥の間の二人をどうするのですか、それがどうも出来ない限り、お前はわたしの頼みを聞いて呉れない理由はありません、いや／＼、もう今となつては、そんな生ぬるい事ぢやありません、お前といふ人は、どうしても、わたしの命令に絶対服従から免れる事ぢやないのよ、友さん、わたしは、お前が好きで好きでたまらなくなつた」

「馬鹿、畜生、阿魔、そんな事が聞いてゐられるか！ どうするか見やあがれ」

「どうともして、御覽、煮るとも焼くとも、横にするとも縦にするとも、わたしの身體を今晚は友さんに、そつくり上げるわ、好き自由に、いゝやうにして頂戴」

「うむ——」

「まあ、あつらへたやうに、そこに蒲團も、枕も出してあるわ、あのお雪さんといふ子、

何て粹まことの通る子でせう」

「ちえッ、どうするか見やあがれ、このかつてえ坊！」

と米友が怒罵して、ぐつと爐邊に仁王立になつて再び叫びました。」

「かつてえ坊！」

恐らくこれが悪罵の頂上でせう、馬鹿といひ、畜生と云ひ、阿魔といひ、何れにしても人に快感を與へるものではない、他を辱かしめると共に、自らを辱かしめずには置かない非紳士的の悪態ではあるけれども、それは尋常人も、どうかすると沸騰的に使用することもあるが、かつてえ坊に至つては——もう頂上であり極度であつて、折助夜鷹の類と雖も、滅多に口にすることを恥づる冒瀆の言を米友が弄しました、弄したのではない、この際の、彼としての憎悪と忌避と憤怒とを、最大級に表現する言葉としては、これより外に見出せなかつたのでせう。

さうして、ぐつと爐邊に仁王立になつて、杖槍を八相の形に構へました、その形相、米友の事だから仁王立ちとはいふものゝ寸が足りない、今し、また燃えさかつた爐火で見ると、

赤々と照らされた黒光りの肌と、忿怒の形相——それは宮本武蔵が刻んだといふ肥後國岩戸山靈巖洞の不動そつくりの形です。

三十四

室内はかうも張りきつた怒罵、悪言の眞最中であるにかゝはず、丁度、この前後の時、一つの生ぬるい、だらしない呼び聲が一つ、思ひがけない方角から起つたのは、「頼むよう、助けて呉んなよう、人殺し——」

何といふ生ぬるい、だらしない聲だらう、だが、明瞭に聞き取れる言葉そのものゝ綴りは、頼むと云ひ、助けて呉れと云ふ、殊に、人殺し——に至つては、もう人間の危急として此れ以上の絶叫は無いのです、然るにもかゝらず、此處へ響いて来る音調は、斯うも生ぬるい、だらしない、齒切れの悪い音調なので、寧ろ、人を馬鹿にしてゐるやうにか聞き取れない。

こんな生ぬるい、だらしない、齒切れの悪い絶叫は、いかに九死一生の場合とは云へ

人は寧ろ助けに行く氣にならないでザマあ見やがれ——と蹴くり返したくなるほどの生ぬるい、だらしないものでありました。

「頼む、頼む、おたのん申します、男一匹が此の場に於て生きるか死ぬか、九死一生の場合でげすから——」

ちえッ——いよく以つてたまらない、聞けば聞くほど生ぬるい、だらしない音聲だ、と云つて、全く聞き捨てにもならないのは、此の深夜、臍吹山の山腹で振り絞る聲なので、すから、わざ／＼、好奇に、こんな處まで、こんな、だらしない絶叫を試みに来る奴があらう筈はないのです。

では、狐か、狸か——併し、今時の狐や狸は、もつと氣の利いた聲色を使ふ、一體何者だ！

たとひ、生ぬるいとは云へ、だらしが無いとは云へ、齒切れが悪いとは云へ、その音色に危急存亡の聲明とはハッキリとしてゐて、また、その響き來つた方角といふのも、此の館の出丸の直下、石垣が高く疊を成して積み上げられてゐる根元から起つて來たのは、たし

かなので、それ、また續いて聞える。

「誰かゝねえのかね、男一匹が、こゝで生きるか死ぬかの境なんだから、どうか助けてお呉んなさい、此の上の火の光をたよりに此處まで斯うやつて、のたりついた處なんだから——どなたか起きて、一つ助けてお呉んなさい、後ろには大敵を控へ、前には絶壁、全く以て、男一匹が生きるか死ぬかの境なんだから——」

續けざまに起る救助を求むるの聲、何てまた生温さだらう、男一匹が生きるか死ぬかの際に、斯ういふ聲を出す位なら黙つて死んでしまつた方がいゝ、勝手にしやがれと、嘸んで吐き出したくなるほどの、いやな聲なのですが併し、それは感情の問題で、事實上、一人の人間が、この石垣の下あたりの地點まで、のたりついて、進退谷まつて助けを呼んでゐることは間違ひでないので、その聲の生ぬるさの故を以て、その人の生命を見殺しにするわけには行かないのです。

「ちえッ——意氣地の無え野郎だな」

内に向つて怒號しきつた米友が、外に向つて嘸んで棄てるやうな聲。

「待つてろ、今、行つて見てやるから」

寸の足りない不動は濛々たる火焰を抱いて、轉がるやうに又も外へ飛び出してしまひました。

さうして、松の大木の根方の處から、三浦之助が安達藤三を呼び出すやうな恰好をして、さうして石垣の下を見下ろし、

「一てえ、どうしたと云ふんだい、この夜中に、こんな處へ、のたりついて人騒がせをやりやあがつて」

と叱りつけました。

「濟まねえ——夜中にお騒がせ申して、ほんと申譯は無えと思ふが、何分、後ろには大敵、處は名にし負ふおろちの棲む膽吹山——日本武尊でさへお迷ひになつた山なんだから、そこんところをどうか一つ……」

「ちえッ、生温い聲をしやあがるなあ、今、繩を卸ろしてやるから、それにつかまつて上つて來な」

「いや、どうも恐縮千萬、實はね、この膽吹山へ藥草を調べに、道を枉げてやつて来たものでけすが、どうもはや、慣れぬ事で道を枉げ過ぎちまつたものでけすから、いやはや、あつちの谷へ轉げ落ちては向ふ脛を擦りむき、こつちの木根へつゝかゝつては頬べたを引こすられ、御覽の通り、衣類は散々に破れ裂け、身體は隙き間もなく掻き傷、突き傷、命からかくこれまでのたりついたでゲス、いやはや、木伊乃取りが木伊乃といふ譬へは古い事、藥草取りに来て、生命を取られ損なひなんていふのは、お話にならねえんでけす、これと申すも日頃の心がけが宜くねえからでけす、今日といふ今日は骨身にこたへたでけす」

下の生温い音聲を發する動物は、引つゞきだらしのない聲でべら／＼とこんな言葉を吐き出したのが意外にもギツクリと米友の胸にこたへました。

「おや——お前はおいらの先生ぢやあ無えか」

「おや／＼、さういふ、そなたの聲に聞き覚えがある、たしかに友兄ともあににきはまつたり、友兄いとあれば、天の助け、こゝで會つたが百年目！」

生温い、だらしのない、齒切れの悪い上に、これはまた何といふキザたつぶりの鈍帳臭い返事だ！

三十五

兎も角も、宇治山田の米友は道庵先生を引き上げて、以前再三繰り返された場面の爐邊に持つて来て押し据ゑました。

この時、お銀様の姿は、もうこゝには見えませんでした、奥の一間も、ひつそり閑としたものです、奥の一間のひつそり閑としたのは今に始まつた事ではないが、お銀様の何れへ消えたかといふことは、多少の問題にならないではありません、まさか、ひつそりした奥の一間の平和をかき亂さんが爲に、あれへ闖入したものとも思はれません、その證據には現に、奥の一間の平和の空氣が少しも攪亂されてゐる模様のない事でわかります。

して見ると、多分、あの母屋へつゞく、あの廊下口から出て行つてしまつたものに相違ありません、成程、さう云はれて見ると、先程、米友がお雪ちゃんの頼みで固く締め切

つた時とは違つて、戸前が少しゆるんでゐる——お銀様は、たしかにあれから母屋の方へ、鬼も角も引き上げ去つたと見る外はありますまい。

爐邊へ持つて来て押し据ゑた道庵を見ると、これはまた、あんまり、だらしが無いのも、斯うなると、寧ろ悲惨な心持がして、米友も、腹を立てる氣にもなれませんでした。

「先生、何てザマだい、そりや……」

「濟まねえ——」

呂律が廻らないだけならいゝが、身體の自由が全く利いてゐないので、飲み過ぎて身體の自由の利かない事は、此の先生としては敢て異例ではないのですが、今晚のは、只事ではない、全く、最前、生温い聲で助けを呼んだ云ひ分と同様、衣服は裂け、面と云ひ、手と云ひ、向ふ脛と云ひ、露出した處は、摺り創、かすり創、二目と見られたものではないのです——でも、申譯の爲かなんぞのやうに、左の片手には、藥草を一掴み掴んで、放さうとはしてゐない、それも、やはりさい前、藥草をとるべく來つて、道を枉げたとか、道に枉げられたとかいふ、生温い聲明が無ければ、米友と雖も、藥草であることは知るま

い、濁るゝものは藥をもつかむといふことだから、崖をでも下り落ちる途端に掴んだ草の根か馬の骨をそのまま、掴み通しにして來たとしか思はれないでせう。

幸に、不幸中の幸なのです、その擦り傷、かすり創といふのも太した事ではありませんでしたから、米友が、手拭をお湯で絞つて、少しづつ拭いてやると、ごまかしが利いてしまふ。

その間も、道庵は、ほとんど正氣がないのです、相手が米友とは、一旦心得たやうだがそれも、もう忽ち見境ひが無くなつてしまつたらしく、妙な手つきをして、四方を撫で廻した刷毛はけついでに、米友の面を撫でゝ見たりして、氣味を悪がらせてゐたが、その朦朧たる眼ざしに早くも認めたのが、ずつと唇の口から問題になつてゐた、お雪ちゃんの米友の爲にとて取り出して置いた夜具蒲團でした。

「占めた——もう此れより外に此の世に望みは無え、世の中に寝るほど樂は無かりけり、浮世の馬鹿が起きて働く……これが此の世の後生極樂」

減らず口だけは、なかく達者で、いきなり其の夜具蒲團にかちりつくと、無我無中で、

それを敷き並べ、枕を横にあてがふと、頭から夜具をかぶつて——早くも鼾の聲をあげました。

三三

「ちえッ——いつになつても人に世話を焼かせる先生だなあ」

手づから夜具を引かけたけれども、兩足が蝸牛の角のやうに、突き出してゐるのを、米友がかけ直して、つくろつてやり、さうして自分はまた爐邊へ戻つて沈黙に返る時に、鶏が鳴きました。

三十六

脱線は道庵の生命である、脱線が無ければ道庵が無いといふほどの事の道理を知り過ぎるほど知り、味ひ飽きるほど味はされてゐる米友にとつては、事柄そのことは驚異ではありませんでした。

たゞ、脱線である以上は、どこまでも脱線でなければならぬのです、脱線でも線といふ名のつく以上は筋道がある筈なのです、つまり脱線はいか様にも突走らうとも脱線であつ

て、無軌道ではない筈です。

従来とても道庵の行動に於て、その殆んど全部を脱線として認められても、やむを得ないものがあるけれども、これを無軌道、無節制、無道德、無政府と見てはいけません、ところが、今夜といふ今夜、道庵が今時分になつて、膽吹の山中へ迷ひ込んで、命辛々の目に逢はされてゐるといふことは、最早脱線の域ではなく無軌道の境に入つてゐる、無軌道といふよりは寧ろ墜落の部に類する、つまり破天荒の行動といはなければなりません、脱線といひ、無軌道といつて見たところで、その行徑が如何に滅茶であり無茶であり常軌を逸してゐたところで、それはまだ地上の區域に即しての行動に外ならぬのですが、墜落となつてはもはや地球上の振舞ではなくして無限の空間的行動、人類が廿世紀以後に至つてはじめて常識として受取ることの出来た飛行機時代に至つて、初めて現はれた處の現象、でなければ日本に於ては元享釋書げんじょうしやくしょの記す時代に遡つて、大和國久米の仙人あたりにしか許されなかつた實演、でなければそれより先き、奈良朝の時代に華嚴宗の大徳良辨らっぺん僧正の幼少時代に於て現出された——それは、今般、此處らでお馴染になつてゐる猛禽と同様、鷲

三三三

の爲にさらはれた幼児としての良辨僧正が経験した空中から地上への墜落、飛行機以前に於ても右様な實例、空中から地上へ人間が降るといふ右の二つの歴史に就て考へて見ましても、それは、今晚の道庵の身の上には甚だ適切には當て嵌まらないのです、道庵がまだ地上の代物であつて、仙人の通力を授かつてゐない事は申すまでもないが、考證を正確にする爲に、こゝに元享釋書の和解の一節を掲げて見ませう。

久米仙ハ大和國上郡ノ人ナリ、深山ニ入テ仙法ヲ學ビ松ノ葉ヲ食シカツ薛荔ヲ服セリ、一旦空ニ騰テ故里ヲ飛過ルトテタマ〜婦人ノ足ヲ以テ衣ヲ踏洗フヲ見タリシニソノ脛ハナハダ白カリシカバ忽ニ染著ノ心ヲ生ジテ即時ニ墜落シケリ、ソレヨリ漸煙火ノ物ヲ食シテ鹿城ノ交ニ立却レリ、サレドモ郷里ノ人モシクハ券約ノ證文ニ其名ヲ連署スル時ハミナ前仙某ト書タリケリ……。

右の一節と比較して見ても明らかなる如く、道庵は「深山ニ入テ仙法ヲ學」ばん爲に此の膽吹山に來たのではなく「松ノ葉」を食せんが爲に來たのでもなく、たゞ、やゝ類似してゐるのは「薛荔」をどうかしようとの學術的探究心に驅られたのでありまして、久米仙

あたりとは、根本的に性質と目的とを異にしてゐる、それにです、第一、相手方の方にして考へて見ても、今時、この膽吹山の山腹あたりに、十八文の先生風情に向つて誘惑を試むべく、ふくらつ脛すねの白いところを臆面なく空中に向つて展開してゐるやうな、洒落氣満々たる女があらうとは思はれないし、また、先刻の大きな鷲にしてからが、良辨とか辨信とかいつたやうな可愛らしい坊主の頭の一つもあれば浚さらつて見ようとの出來心を起すかもしれないが、この薄汚ない、拾つたところで十八文にしかならない老爺を、わざ／＼重たい思ひをして空中まで引揚げて見ようといふ好奇心も起らないでせう。

して見れば、道庵先生が今晚このところへのたり着いたのは、結局、脱線でもなく、無軌道でもなく墜落でもなく要するに尋常一樣の平凡にして最も常識的なる行動の飛ばつちりと見る外はないので、事實も亦、その通り、その最もよく證明するところのものは、この時に至るまで、今も現に縦の蒲團まくらを横にしてのたり込んだ寢床の中までも、しかと片手に握つて放さないところの一片の草根木皮が、それを有力に説明するのであります。

道庵先生こそは實に藥草を採取すべく、乃至はそれを調査すべく道を枉げて此の膽吹山

に入りこんだのであります。

醫者が藥草を取る——天下にこれほど當然にして常識的な行動はない、酒屋が酒を賣り、餅屋が餅を賣り、車曳が車を曳き、犬が西へ向けば尾が東といふことほど、自然にして通常の行動であり、殊にまた、その膽吹山といふ山が藥草の豊富を以て天下に聞えた山であるといふ以上は——それは明かに歴史も證明し、實際も裏書きする——織田信長が天主教に好意を持つてゐた時分に、この山を相して藥園の地とし、外國種の藥草三千種を植ゑたといふ事蹟は動かさない事だし、更にその以前に遡つて見ると、延喜式の中に典藥寮に納むる貢進種目として「近江七十三種、美濃六十二種」とある藥草はその何れの方面よりするも必らずや、此の膽吹山による處の藥草が大部、殆んど全部を成してゐるであらうことは信ぜられるのですから、苟も醫學に志あり、本草に興味を有する人にとつてはこの膽吹山は唯一無二の寶の山といつてもよいのです、されば、職に忠實であり、學に熱心である處の日頃心掛けのよい道庵がこの山に突入することが當然で、突入しないことが寧ろ外道であり怠慢であるといふ理窟になるのですから、その點から考慮しても、道庵の膽吹入り

は、脱線でもなければ無軌道でもなく、また墜落でもないことの證言は成り立つのです、たゞ、もう少し追究すると、そんならそれで、從者なり案内人なりを連れて、白晝やつて來ればよいのに、此の眞夜中に、かういふ危険を冒してまで探究しなければならぬ必要と藥草とがあるか？ といふやうなことになるのですが、それは専門家としての此の先生に減らず口を叩かせると、本來、藥草といふものは、見物けんぶつに來るべきものではない、臭をかいて成る程とさとするものもある、臭をかぐには深夜に限る、なんぞと理窟をこねるかも知れない、また草木の眞の植物的機能を知る爲に——草木と雖も動物と同様に休息もすれば睡眠もとする機能がある、それを觀察するために、わざと深夜を選んだといふ理由も成り立たぬことはないでせう、殊にまた植物の葉といふものは、空氣に先だちて暖まり、空氣に先だちて冷ゆるものであるから、葉温は空氣の温度に支配せらるゝといふよりも、寧ろ葉温が氣温を支配するといふのが至當であるといふ見地から、植物の葉の温度は、日中には著しく氣温よりも高く、晴夜には著しく氣温よりも低いといふこの實驗を重ねる爲に、わざわざ深夜を選んだといふことの理由も成り立たないではないが、地方から最近轉任のお

巡りさんが、舉動不審犯を交番へ連れ込んだ時のやうにこの先生の行動の出處進退を調べ出しては際限がない、第一、この膽吹山へ突入までの石田村の田圃の中で、衣裳葛籠を這ひ出して、田螺に驚いて蓋をさせたあの場を、どうしてどういふ風に遁れ出してこの膽吹山まで轉向突入するまでに立至つたのか、その證據固めをして、辻褄を合せるだけでも、容易な搜索では追つかないが、それは酔のさめる時を待つて徐ろに訊問をつゞけても遅くはあるまいが、要するに道庵は道庵として職に忠實にして學に熱心なるの餘り出でた、全く無理のない行動をとつて、こゝに縦の蒲團を横にして上平館の松の丸の爐邊に寐込むまでの事情に立ち至つたことを信じて置いていたよければ宜しいのです。

三十七

右の如くして道庵先生の行動に關する限り舉動不審は一應晴れたけれども、此の麓の宿には、それ以上に解せぬ一行が陣取つてゐるのであります。

春照の高番といふ陣屋に夜もすがら外には篝を焚かせ、内は白晝のやうに蠟燭を立てさ

せて、形勢穩かならぬ評議の席がありました。

事の體を見ると、これはこのほど來、麓の里を脅かした處の子を奪はれた猛禽の來襲に備へるべく村の庭場總代連が警戒の評議を凝らすの席とも思はれず、さりとして長濱、姉川その他で見かけた一揆の雲行に似たところの人民の集合のやうな、齟齬たる肅殺味も見えない、相當怒張してゐるにも拘らず、甚だ間が抜けて、卑劣な空氣が漂うてゐる處に多少の特色がある。

その面觸れを見渡すと——は、あ、成る程、枇杷島橋以來の面ぶれ、フアツシヨイ連、安直、金茶、なめ六、三びん、よた者——草津の姥ヶ餅までのしてゐた筈なのが引返してこゝは伊吹山麓、春照高番の里に許すまじき顔色で控へてゐる。

特に、今晚は、あの御定連だけではない、正面に、安直の一枚上に大たぶさの打裂き羽織が控へてゐる、これぞ彼等が親分と頼む木口勘兵衛尉源丁馬が、持に三州方面から駆けつけたものと見受けます。

木口が床柱を背負ふと、安直がその次に居流れ、そこへまた例の御定連が程よく相並ぶ

と、やがて次から次、この界限でも相當の無職^{ぶしやく}浪世^{なみのよ}と見えるのが、馳せ集まつていづれも膝^{ひざ}つ小僧^{こそう}を並べて、長脇差^{ながわきざし}を引つけ、あんまり祝^{いわい}みの利かない眼^{まなこ}をどんぐりさせながら、精々^{せいせい}凄味^{せきみ}を作つてゐる。

土間を見ると大根おろし、掻きおろしが十三樽。

「古川^{ふるがわ}の——」

と安直^{やすちか}が、らつきやう頭^{かぶ}を、ゆらりと一つ振り立てると、

「はい、安直^{やすちか}兄^{あに}い、何ぞ御用^{ごよう}で……」

としやくくり出たのが、古川の英次^{えいじ}といふ三下奴^{さんしたやつこ}です、さうすると親分の側^{わき}にゐたあだ名^なをダニの丈次^{ぢやうじ}といふ三下奴^{さんしたやつこ}が、

「手^てめえ、なか／＼近ごろの働^{はたら}きがいゝで、木口親分^{きぐちおやぢ}のお覺^{おぼ}えがめでてえ、ぢやによつてお餘^{あま}りを一皿^{いちばん}振舞^{ふるま}つてお呉^くんなさるから、有難^{ありがた}くいたでえて三べん廻^{まわ}つて其處^{そのところ}で食^くひな」と、いふと、古川の英次^{えいじ}が、ペコ／＼と頭^{かぶ}を下^{くだ}げて

「兄^{あに}い、有難^{ありがた}てえ、可愛^{かわい}がつてやつてお呉^くんなせい、ぢやあ、遠慮^{えんりょ}なしにいたゞきやすぜ」

と云つて、古川の英次^{えいじ}といふ三下奴^{さんしたやつこ}が、木口親分^{きぐちおやぢ}から廻^{まわ}つて來た食^くひ残^{のこ}しのライスカレ^{ライスカレー}一^{ひき}見たやうな一皿^{いちばん}をダニの丈次^{ぢやうじ}の手^てを通して押^おしいたゞき、ガツ／＼と咽^{のど}喉^どを鳴^ならして、食^くひはじめました。

「旨^{うまい}めえか」

「旨^{うまい}めえ／＼、木口親分^{きぐちおやぢ}のお餘^{あま}りものと來ちやあまた格別^{かくべつ}だ」

「おい、下駄^{げた}つかけの時次郎^{ときじらう}、手前^{てまへ}も來て親分^{おやぢ}のお餘^{あま}りものに一皿^{いちばん}有^ありつきな」

「有難^{ありがた}てえ」

と、云つてしやくくり出たのは、下駄^{げた}つかけの時次郎^{ときじらう}といふ、これも新參^{しんさん}の三下奴^{さんしたやつこ}、ダニの丈次^{ぢやうじ}が勿體^{むたい}ぶつて、

「手前^{てまへ}たちよく、木口親分^{きぐちおやぢ}のお手先^{てまへ}になつて忠義^{ちゅうぎ}をはげむによつて、親分^{おやぢ}から、斯^かうして殘^{のこ}りものをしこたま惠^{めぐ}まれる、親分^{おやぢ}の有難^{ありがた}味^{あじ}を忘れちやならねえぞ」

「どうして、忘れていゝものか、おれたち一騎^{いちき}の器量^{きりやう}ぢやあ、とても、芥箱^{かひばこ}の殘飯^{のこめし}にもありつけねえのが斯^かうして結構^{けいこう}な五もくのお餘^{あま}りに有^ありつくといふのは、これといふも皆^{みな}ん

な親分の恵み、そこんとは一つ安直兄あんちくあにから宜しくおとりなしを頼みますぜ、ちやあ」と云つて、古川の英次と下駄つかけの時次郎が、木口親分と、安直兄の前へ頭をペコと三つばかり下げて、その座敷を三べんばかり廻ると、しやんくくと二つばかり手を打つて元の座に戻りました。

「下つ澤しもさばの勘公かんこう——手めえ、また何といふドヂを踏みやがつたんだ」
「兄い、濟まねえ」

ダニの丈次の前へ下つ澤の勘公がペコくと頭を下げる。

「折角隠し穴をこしらへて、今度と云ふ今度は、十八文をとつちめたと安心をしてゐると、また、つるりと脱けられて、上げ壺あげぼを食はされた、のろま野郎——勝手口へ廻つて當分の間窮命きうめいしてゐろやい」

「面目しでえも無え」

以前の二人の三下は、親分の覺えめでたく、たつぷりとお餘りものもありついてゐるにかゝはらず、哀れをとどめた一人の三下は、臺所だいどころへ追放ついほうを命ぜられてしまつたのは、何か

相當重大な過失があつたと見える。

そこで、一座が甚だ白け渡つた時分に、突然、

「江戸ッ子、ゐやはらんかな、江戸ッ子一人、欲しいもんやがなあ、こちの身内に江戸ッ子一人ゐやはらん事にや、わてどもならんさかい、ちやあ」

と、不安らしく呼びかけたのは、安直兄あんちくあにでありました。

安直兄あんちくあにが、どうして、こんなに不安な音色を以つて呼びかけたか、その内容は、まだ、よく分明しないけれども、この際兄あにが味方のうちに、一人の有力なる江戸ッ子を欲しい、といふ希望を述べ出したものであることだけはわかるのです、そこで、一座のお互あひひが、改めて一座のうちを見廻みまわしました。

安直兄あんちくあに——の渴望する江戸ッ子らしい、アクの扱けたのは生憎御同座おひやくのうちに一人も居合はさない、いづれを見ても山家育やまがち、よんどころなく、古川が、

「下駄つかけの兄い、お前は江戸ッ子ぢやなかつたけエ」

下駄つかけの時次郎が、正直さうにかぶりを振つて、

「おらあ、江戸ッ子ぢやあ無え、濱ッ子だ」

「濱ッ子、そいつは知らなかつた、お前は江州生れだつたかいのう」と古川の英公がいふ。

「なあ——に」

と、下駄つかけが生返事、このところ受け渡しが必要を得ないのは、濱ッ子といったのを、古川がさし當り江州長濱ッ子と受取つたものらしい。

「ちやあ」

安直が齒痒がつて、焦れると、精々凄味をつけた一座がテレきつてしまひました。

「あの憎い〜十八文の奴め、江戸ッ子を鼻にかけて、どもあかん、江戸ッ子やかて、わて、ちよつとも怖れやせんけどな、わて、販者やによつて、啖呵がよう切れんさかい、毒をもつて毒を制するといふ兵法おますさかい、江戸者を懲らすには江戸者を以てするが賢い仕方やおまへんか、あの十八文に楯つく江戸者、一人探がしてんか、給料なんぼでも拂ひまんがな」

安直兄いは、斯う云つてまた更らに一座を見廻したものです、一座の者には、よく安直の心持がわかる。

一旦は中京の地に於て食ひ留めようとして見事に失敗し、關ヶ原では却つて相手の大御所氣分を煽つてしまひ、近江路は、草津の追分で迎へて撃つて手詰の合戦と手ぐすね引いてゐると、早くも敵に膽吹山へいなされてしまつた——さあ、残るところは宇治、勢多の最後の戦線である、だが、この宇治、勢多といふ奴が、古來、西軍が宇治勢多を要して勝つたためしが無い、よつて、有無の勝負はこの膽吹山——こゝで敵と目指す道庵を石田小西の運命に追ひ込んでしまはない事には、京阪の巷がその蹂躪を蒙る。

そこで取敢へず此の場の第一線に作らせた落し穴が、下ッ澤の勘公の間抜けで、やり損なひといふ段取りとなり、些少の擦り創、かすり創だけで道庵を取り逃がした以上は、第二の作戦に彼等が窮してしまひました、安直が悲鳴に類する叫びをあげて、江戸ッ子、江戸ッ子と續けざまに呼んだのは、もう此の上は毒を以て毒を制するの手段、つまり、江戸ッ子を以て江戸ッ子を抑へるの手段に出でる外には詮方無しとあきらめたものでせう。

ところが——此の一座に江戸ッ子が一人もゐない、一座が荒寥として、悲哀を感じたのは此の時のことでありました。

ところへ、どうでせう、遽かに表の方に人のおとづれる物音あつて、

「親分——兄い、變なところでお目にかゝりやすが、眞平御免くだんせい」

と、また一種變つたなまりの聲が聞えて、襖が左右へ開けられたと見ると、そこへ現はれたのは、江戸相撲で三段目まではとり上げた松風まつかぜといふ相撲上りうしあげでありました。

三十八

「おゝ、松風、いゝ處へ」

「どうして、こゝがわかつたエ」

「いや、道中、ちつと、聞き込んだものでござんすから、多分、丁馬親分や安直兄いも此方でござんせうとわざ／＼たづねて来やんした」

「よく来て呉れた、一人か」

「ほかに、連れが一人ござんす」

「ぢや、こつちへ通しな」

「連れて来てようござんすか」

「遠慮は要らねえ、友達かエ」

「いや、わつしの川柳の師匠でござんす」

「おや、川柳の師匠、手めえ洒落れたものを連れて歩いてやがるんだな」

「師匠は江戸ッ子でござんす」

「なに、江戸ッ子！」

「凡そ、大名旗本の奥向より川柳、雑俳、岡場所、地獄、極樂、夜鷹、折助の故事來歴、わしが師匠の知らねえ事はねえといふ、江戸一の通人でござんす」

「そいつあ、耳寄りだ」

「天から降つたか地から湧いたか」

「丁馬親分——安直兄い、およろこびなせえ」

「何はともあれ、その江戸ツ子の大通先生を片時も早く此の場へ……」
「合點でござんす」

暫くあつて、ひよろ／＼と、此の場へ連れて來られた一人の通人がありました、見受けるところ年の頃は道庵とほど近いし、氣のせいか背格好もあれに似たところがある、それを見ると木口親分もグツと氣を入れたが、安直が思はず膝を進ませ、

「あんたはん、ほんまに江戸ツ子でおまつしやろ」

まかり出た通人がグツと反身になつて、

「わつしやあ、よた村とんびといふ江戸ツ子でゲス、お見知り置きが願げえてえ」

「ナニ、四ツ谷鳶だつて！」

無様に下駄つかけが、頓狂聲を揚げたのを、

「おゝ、これは、よた村の先生、よくござつたの、かねて御高名は承り及びました」

木口親分が、愛想を云つて、とりつくろひました、よた村ながしと通人が名乗つたのを粗忽つかしい下駄つかけがよつやつとんび（四谷鳶）と早耳に聞いてしまつたのでせう、

それを取りつくろつて木口親分が、

「先生、江戸はどちらでござるな」

「わつしやあ、江戸は江戸だが、江戸を十里離れて……」

「え、江戸を十里離れて……」

「武州八王子の江戸ツ子でがんす」

「八王子の江戸ツ子」

一座がこゝで、またちよつとテラされました、江戸ツ子といふことに重きを置いて、江は何處と聞いたら神田とか本所深川とか見榮にも切り出すものと期待してゐると、江戸ツ子は江戸ツ子だが、江戸を十里離れた武州八王子出來の江戸ツ子と聞いて、一座が早くも興さめ面になつたのを、そこは老巧なみその浦のなめ六が、體よく取りつくろつて、

「如何にも、武州八王子——あれは小田原北條家の名將の城下、江戸よりも開府が古い、なか／＼由緒ある處で、新刀の名人繁慶も一時あれで、たゞらを打つてゐた事がござる」
「成ほど」

なめ六の取なしで、座なりが直つて來ると。」

「八王子は糸織がようござる」

「織物の名所でござつたな」

「お十夜！」

まではよかつたが、

「八王子在の炭焼はまた格別な風流でござる」

「炭焼」

「阿呆云はずときなはれ、江戸で炭が焼けますさかい」

安直兄いがたしなめるとダニの丈次が、

「でも、八王子在から出て來た炭焼だが、釜出しのいゝのを安くするから買つておくんなせえと付振賣りに來たのをわつしや新宿の通りでよく見受けやしたぜ」

「では、やつぱり江戸でも炭を焼くんだね」

「炭焼江戸ッ子！」

斯う云つて、口を迂らしたものとがあると、急に一座が湧いて來て、

「炭焼江戸ッ子！」

「道理で色が黒い！」

それをきつかけに、新來の大通人の面を見ながら、どつと一時に吹き出してしまひました。

三十九

ところが、通人もさるもの、存外悪びれません。

「君達、まだ若い、そもく武州八王子といふところはなめさんも先刻云はれた通り、新刀の名人繁慶もあつたし、東洲齋寫樂も八王子ッ子だといふ説があるし、また君たちには、ちよつと買ひきれまいが二代目高尾といふ吉原きつてのおいらんも出たし、それから君達いまだに車人形といふものを見たことあるめえがの——そもく」

通人は車人形の來歴と實演とを型でやつて見せた上に、

「近代ではまた、鬼小島端堂といふ五目並べにかけては無敵の名人の事はさて置き、鎌倉

權五郎景政も八王子ツ子だと云へばいへるし、尾崎學堂も八王子ツ子だと云へば云へるんだが、あいつあ共和演説だからおらあ虫が好かねえ——それから學者で鹽野適齋、醫者の方では桑原騰庵……天然理心流の近藤三助、國學で落合直文」

通人は次から次と八王子ツ子の名前を並べて、

「君たち、八王子八王子と安く云ふが、そも／＼八王子といふ名前の出所來歴を知るめえな、江戸は江の戸だあな、アイヌ語だといふ説もあるが、大きな川が海へ注ぐ戸口だと見てさしつかへねえ、大阪は大きな坂だよ、大きな坂だから運賃が安いか高いか、それだけの事なんだが、八王子と來ると、もつと深遠微妙な出所來歴がある、君たちは知るめえが抑も八王子といふ名は法華經から來てゐるんだぜ、法華經の何處にどう出てゐるか、君たち一べんあれを縦から棒讀みにして見な、すぐわかることだあな、ところが、ものを知らねえ奴は仕方のねえもんで、近頃徳富蘆花といふ男が、芋虫のたわごとといふ本を書いたんだ、その本の中に、御丁寧に八王子を八王寺、八王寺と書いてゐる、大和國には王寺といふ處はあるが、八王子が八王寺ぢやものにならねえ、蘆花といふ男が法華經一冊満足に

讀んでゐねえといふことが、これでわかる……」

斯ういふ説明と氣焔とを聞いてゐるうちに一座がまた感に入りました、成ほど、この老爺物識りだ、色が黒いから「炭焼江戸ツ子」だなんて云つたのは誰だ！ 上は法華經よりはじめて、江戸時代の裏表を手取るやうに知つてゐる、のみならず、この當時、母の胎内に身ごもつてゐたかゝつたかさへわからない徳富蘆花といふ文學者の文字使ひの揚げ足までもちゃんと心得てゐる、それからまた、その皮肉な口のきゝつぷりが、どうやら目指す敵の遺庵に似通つたところが無いでも無い。

こいつあ儲けものだ！

一座が意氣込んで聞いてゐるので、通人は漸く得意になり、

「君たちには、まだ江戸ツ子の定義と分類がわかるめえ、早い話が、君達あ、昔の通人風來山人平賀源内といへば忽ちちやき／＼の江戸ツ子と心得るだらうが、大きに違ふ、君達あ、十里離れた江戸ツ子だの、炭焼江戸ツ子だの、色が黒いの何のと云ふけれど、風來山人なんぞは江戸を距る海陸百七十九里半四國の讚州高松といふところから出て來た四國猿

の江戸ッ子なんだ、その四國猿の風來山人が江戸ッ子で通るやうになつた因縁といふものは……」

「もう澤山——わかりました、時に大通いゝ處へお出で下さつた、我々の仲間で、ぜひ一つ通人に腕貸をしていただきたいのは外ではない——他聞を憚るによつてちと」
そこで木口勘兵衛と安直と通人が鼎になつてひそくと物語りをはじめました。
三下奴達も三人の密談をさまたげまいとしてすべて控へ目になると、この席がしいんとして來ました。

ところが、この座席がしいんとして來ると同時に襖を隔てた隣りの席が遽かに物騒がしくなりました、遽かに物騒がしくなつたのではない、先刻から随分物騒がしかつたのですが、こちらがいきり立つてゐる爲になかく耳へ入らなかつたのですが、今、こちらが控へ目にして静まつた爲に隣り座敷の物騒がしさが一きは芽えて聞え出したといふものです。聞いてゐると、キャツ／＼と云つて引かいたり、ワツと云つて笑つたり、バタ／＼と物を捨てるやうな音がして見たり、鏡をバラ／＼と掻き集めたりするやうな音がする、こち

らが何で静まり返つたかといふやうなことは一向お構ひなく、興に乗じてどつと崩れるやうな笑ひが起きたり、また存外眞剣になつて張り合つてゐるやうな氣色にも聞えたり、

「坊主」「青丹」「びかー」

「雨、あやめ」「三光」

といふやうな聲が洩れて來る、はゝあ、賭博をやつてゐるな！ 賭博の一種花合せを。しかも、こちらのことにおかまひがなく、餘りにのぼせ上つて賭博をしてゐるものだから、こちらから下駄つかけの時次郎がたまりかねて、

「おい、もうちつと静にしてお呉んなせい」

隔ての襖をサラリと開けて、たしなめ面をした、その隙間から見ると、居る居る車座になつてばくちの大一座。

正面切つたのは、色の白いちよつとぼろ／＼眉のお公卿さんに見えるやうな大姐御、どてらを引かけて、立て膝で手札と場札とを見比べてゐる。

その周圍に居流れた雪の下の衆公、里芋のトン勝、さつさもさの房見といったやうな

處が、血眼になつて花を合せてゐる。

一方には、別にまた自分の女房らしいのを賭け物に引き据ゑて置いて、頻りに丁半を争ふ二人組もある。

四十

あだしことは、さておき、上平館の一室の爐邊に於ては、宇治山田の米友が寂然不動の姿勢をとつて、物を思ひつゝあることは以前の時と變りありません。

此の度は、何かこんがらかつた想像がそれからそれと思案に餘るものがあると思えて、夜舟を漕ぐやうな懈怠が無いのみならず、その持て餘す思案がいよゝ／＼重くなると共に、頭も眼も相當に冴えて來るのです、こゝでたうとう鶏が鳴いてしまひました。

鶏が鳴いたといつても、必ずしも夜が明けたといふ意味にはならない、一鳥啼いて山更に幽なりといふこともあるのだから、時と人によつては、これから日の出の朝までをはじめて夜の領分としてこの邊から徐ろに枕につかうといふのも多いのです、今の米友は

その何れにも頓着はないのですが、膾吹の全山はまだ鶏の一啼によつて呼び醒されてはゐないのです。

思案に耽る米友は、無意識に火箸の先きで爐邊の軽い薪を取りくべながら重い頭を垂らしてゐたが、ふと、

「ムニヤ、ムニヤ、ムニヤ」

といふ聲に驚かされて、その傍へを見やると道庵先生が縦の蒲團を横にして寐てゐるのです。

「ムニヤ、ムニヤ、ムニヤ」

といふのはつまり右の道庵先生の、これぞ熟睡中に無意識に口を動かしたところの、うわ言のやうなものであります。

そこで、米友は、また先生の爲に夜具の片端を坐りながらちよつと引き延ばして、成るべくその足の方の部分が露出しないやうにと氣を配つてやりながら、今、ムニヤ、ムニヤ、ムニヤといふ發音をした處の先生の痕跡を見るときも、見やりました。

「御苦勞の無え先生だなあ」

二四八

と、その寐顔を見た時に、米友が改めて呆れ返るやうな表情をしました。

顔面部には前にいふ通りに相當の負傷をさせられてゐながらもその寝顔といふのは相も變らず人を食つたものだと思はずにはゐられません。

いかに疲勞したにしても、この際、斯うして平氣で熟睡をとるのみならず、ムニヤ、ムニヤ、ムニヤといふやうな譚言を發するの餘裕ある先生を、米友は呆れ返りもし、また、それとなく敬服もしてゐるやうなあんばいでした。

併しました、米友は自分がこの先生見たやうな偉人になれない如く、この先生も亦自分のやうな小人になれないのだ——といふ事をも合せ考へさせられてゐるやうです、特にこゝに偉人と云つたのは人格的内容を持つた意味のものではなく、單に先生の體軀が自分に比して長大であるところから、これを偉人と呼び、自分の軀幹が先生に比して遙かに小さい處から見て小人と名付けたまでの事なのです。

そこで「たゞ、長醉を願うて、醒むることを願はざれ」と云つたやうな、かなりの寛容

な態度で道庵先生を扱ひながら、米友は、その時に、また一つ、昔のことを考へ出しました。

この先生こそは自分に比して偉人であるのみならず自分にとつては大恩人であるといふことの記憶が、この際あざやかに甦りました、一體、自分といふものは、伊勢國の尾上山の頂から血を見ざる死刑によつて此の世界から絶縁された身の上なのである。

一旦は全く此の人間社會から絶縁された身が再び此の人間社會、俗に娑婆と呼び習はされてゐる處の地上へ呼び戻されたのは、船大工の與兵衛さんのお情けもあるが、與兵衛さんは死骸としておいらを引取つてくれただけのものなんだが、その途中にこの先生が轉がつてゐて、その爲に計らずも自分はこの世界へ呼び生かされて來たのだ、與兵衛さんが身體だけを持つて來てくれ、この先生が再びそれに生命を吹き込んで呉れたのだ。

あの途中、この先生がゐなければ、死骸としてのおいらを與兵衛さんが、そつと持つて來て、それとなくドコかのお寺の墓場の隅っこへでも穴を掘つて、おいらの此のちつぽけな身體を納めてしまひ、そこでおいらはもう疾うに土になつてしまつてゐるのだ、だから、

あれから此方へ今日までの生命といふものは、全く此の先生の賜物なんだ。

先生の爲にやあ、生命を投げ出しても惜しく無え——といふのは當り前過ぎるほど當り前なんだ、米友は、いつも考へて恩に着てゐる通りを、今も亦思ひ返したのに過ぎませんが、今日は、どうしたものかそれに一步を進めて、

「だが、人間といふ奴あ、生きてゐるのが幸福か、死んでしまつた方が樂なのか、わからねえな」

生死の事を考へると、どうしても米友は異體同心の昔の友を思はずには居られません、昔の友といふのは間の山以來のお君のことです、お君を考へると、ムク——

「今ごろはどこにどうしてゐやがるんだかなあ」

さすがの豪傑米友が、こゝに來ると、どうしても半七さんの安否を思ひわづらふやうなセンチメンタルの人となるのを如何ともすることが出來ない。

あゝ、この頃、少し紛れてゐたのが、また酒き上つて來やがった。
「思だなあ——」

思ふまいとして抑へると意地悪く手に合はないやうに嘖き出して來る。

「思だなあ——」

拜田村の村と村の田の畦と畑の畔とを走る幼ない時の自分の姿がまざく／＼と眼の前に現はれて來ました。

薬の上からおいらは親といふものゝ面を知らねえ——

あの田圃の畔を流れる川の水は綺麗だつたなあ、芹が——芹が川の中に青々と洗んでゐやがった、鮒を捕つたり、泥鰌を取つたり。

お君あ、君公は子供のうちから綺麗な子だつた、皆んなが振り返つたなあ、あいつが——あいつもお前、母親はわかつてるんだが、父親といふのは一體ドコの何者だかわからねえんだぜ——おいらとの間はまあ兄妹見たいなもんだが、本當は兄妹より上なんだぜ、子供のうちあ、二人、一緒に抱き合つて薬の中へ寝て育つたんだ、子供のうちあねえや、いゝ年になるまで、あいつが十の幾つか上になつた時分に、

「もう、友さん、二人で一緒に寝るのをよしませうよ、人が笑ふからさ」

とあいつが云つたから、おいら、

「うむ、寝たくなけりや、寝んなよ」

と云つて、それつきり、二人は別々に寝るやうになつたんだが——今考へて見ると——米友は、何か頻りに意氣込んで眼に一種異様の光を帯びて來ましたが、ちつとしてゐるうちに、涙が連々として頬に傳はるのを見ました。

「あの時分のやうに、薬やぐん中で、もう一べん君公を抱いて寝てやりてえ」
今度は米友がうわ言のやうに云ひつゞけました。

「育たなけりやいゝんだ、人間て奴やつは、いつまでも餓鬼でゐさへすりや、男が女を抱いて寝たつて、女が男に抱かれて寝たつて何ともありやしねえんだ——人間は育ちやがるから始末が悪い」

と云ひ出しました。

併し、それは無理である、生きてる以上は育つなといふのは無理です、その位なら寧ろ生れるな——といふことの抜本的になるには及ばない、だが、米友としては、

「生れなけりや宜かつたんだ、君公もおいらも——いや有ゆる人間といふ人間が生れて來さへしなけりや世話はなかつたんだが」

といふ結論までは行かないで、一きはの懊惱あうのうをつゞけて居りますと、ふつとまた一つ聞き耳を立てると、この懊惱も空想も一時ふつ飛んでしまひ、思はず凜然れんぜんとして眼を注いだのが、例の、その以前から靜まりきつたところの納戸なだの間までありました。」

四十一

併し、今こゝで勃然として氣がついて凜然として眼を注いだゞけでは、米友として、もう遅かつたのです。

たしかに、あの一間の中から脱け出したに相違ないと信ぜられるところの一つの遊魂いうじんが三所權現の方に向うて漂たふよひはじめたのは、それよりずっと以前の事でありました。それは黒い着物の着流しに、兩刀を横へて杖をつき、さうして面は頭巾に包んで居りました。」



1144



1145

この深夜、鶏は鳴いたが闇は漸く深くなり行くやうな空を、又しても、時ならぬ登山者が一人現はれたと見なければなりません。

その足どりは先日、同様の夜山をした辨信法師と同じやうに、弱々しいもので、十歩往いては立ちどまり、廿歩進んでは休らひつゝ息を切つて進んで行くのは、まさに病み上りに相違ないが、でも、何か別しての誓願あればこそ夜山をするものでなければ今時、飄々と出遊する筈はありません。

足どりこそ、たど／＼しいもので、歩みつかれて息ぎれのする呼吸を見てもあぶないものだが、若しそれ、時と處とによつては、身の輕快なること飛鳥の如く、出沒變幻すること遊魂の如くなるが——彌勒堂あたりから松柏の多い木の間をくぐる時分に、これはまた、遽かにバット満身に青白の光が燃えついて來たのはどうしたものでせう。

その形相を見るに生ける長身の不動が、火焰を吹き靡かせつゝのつし／＼と歩み出したやうなものです、たゞ、その火焰の色が不動尊のは普通の火の如く紅いが、この物影から起る猛火は青いのです。

それは青い火が後ろから飛んで來て、不意にこの物影にむしりついたのか、或ひはこの物影の體內から自然に青い火が燃え出してこの雰圍氣を作つてしまつたのか、さうでなければその邊の焼け残りの野火にでも觸れて忽ちこんな火焰を背負はされてしまつたのだから、その事は、はつきりわからない、最初にあの家を出る時は、證據の誰にもわからない位でしたから、當然こんなに火を背負つて出て來た筈はない、こゝまで來る途中、何時、何處でといふことなく、松柏の林をくぐるかゞりきれないうちに、この通り火の人となつてしまつたのですが、この火は、世間普通の紅い火のやうに、この人を焼く力を持つてゐないことは確かで、斯くも全身に火を背負はせながら、その足どりとしても息づかひとしても従前とさのみ變ることはなく、強ひて我と悶搔いてその火を採み消さうなんぞしない落つきを見ても、青くして盛んなる火には相違ないけれども、熱くして人を傷付ける火でないことだけは認められる。

のみならず、この物影がはつと物を踏み越えた時はその足許から、木の間のさばりを拂はうとして手を擧げた時は、その手先から、或ひはくゞり入らうとして傾けた頭巾の上か

ら、つまり、全身からは全身として發火してゐる上に、簡別的に四肢五體の一部分を動かせば、その動かした處から、青い火が湧いて出るのです。

柳川一蝶齋の一座の手妻に水藝といふのがある、錦櫛の袴をつけた美しい娘手品師が手を擧げれば手の先きから、足をあげれば足の先から、扇子を開けば扇子から、袴の角からも袴のひだからも水が吹き出す、今こゝに現はれた物影は、手品遣ひの藝當を習ひ覚えて、その傳をこゝでひそかに實演を試みてゐるわけでもあるまいが、その現はれたところは、まさにあれと同工異曲で御當人はそれを氣にしてゐないこと勿論だが、もし、他人があつて、たとへば劍の巷にある人を呪うて貴船の社へ深夜の祈りに出かけた悪女——には、出逢ふ處のほどの人が皆倒れて死んだやうに、相當の被害が無くては納まらないほどの事體なのだが、幸に此の奇怪な現象は、誰の眼にも觸るゝ事無しにある時間を限つての後、消滅してしまひました。

が奇怪な現象が消滅すると共に、物影そのものゝ姿も尋常一様の漂浪者の姿となつて殘されたが、それがやがて松柏の林の中へと暫らくは身を没して現はれることがありません

でした。

併し、また、幾ばくもなくして、同じやうな身を登山表參道へ現はしたところを見ても、この人の四肢五體が全く無事であつたことがわかり、同時にあの青い火の光といふものが決して人を傷ふ力のある氣體では無かつたといふことが充分に證明されるのです。

して見れば、あれは一體、何のいたづらか、山に通なる人はいふ、膽吹の山には他の山に見られない幾多の怪現象が起る——本來膽吹のやうに山が獨立してみると、天象の變化は他の連脈的アルプス地帯に於けるよりも一層著しいものがある、例へばこの膽吹の如きは日本本土の中央山脈とは相當の距たりがあり、伊勢路から太平洋を前にして、後ろは日本海を背にしてゐる、その遠近に大野があり大湖があり、中國から内海へかけて山らしい山は無い、斯ういふ山には天界と空界と地上との現象が錯綜して起つて、さうして一種幻妙不可思議な怪現象を捲き起さうといふことは、實に怪に似て怪ではないのです、たとへば、氷點下の山を襲つて來る霧が、立つてゐる物體にそのまゝ凍つて、風の吹く反對の方へ重なり積つて行き、思ひ設けぬヌーボー式の構造を見せると共に、普通針金の太さ

を三尺にまでもして見せる霧氷といふものがある、また太平洋から来る南風と日本海から来る北風とが頂上で入り亂れて気温が逆轉し、頂上の方が非常に暖かくて麓の方が著しく寒かつたりする事もある。

殊に、セント・エルモスファイアーといふのは日本に於ては、この膽吹山で發見されたのが最初だといふことだ、大海を航海中の船のマストの上に於て屢々起ることのやうに、氣象の關係で、物の尖端に電氣を起し青い焰が燃えさかる、併し、この電氣は、少しも人身に危害を與へることが無い。

といったやうな現象を考へ合せて見ると、只今の怪現象も必らずしも生身の變態不動でも無ければ、手品遣ひのたはむれでもなかつたとは云ひ得られる、たゞ、右のやうな青い火の現象は多く、冬季の闇の夜の暴風の晩を以て現はるゝを常とするといふのに、今晚——今晚は通常の晩秋の夜氣のうらななのです。」

四十二

松柏の間をくゞり來つて、春照からの表參道の大路へ通じた時、この物影はそこから爪先上りに登山路につくかと思へば、さうでもなく、ある地點でずつと横道を左へ切れてしまつた處を見ると、はじめてこの物影は誓願あつて一圓に夜山をする人でないことだけがわかりました。

そんならば山上山下或ひは中腹の何れに目的があつて、さまよひ出したのか、それも暫しは姿と共に掻き消されてしまつたが、また暫らくすると、大平寺平の廣場へ來て針のやうに突立つてゐるのを見ました。

動かして見なければわからない位ですが、杖ついた身の針のやうにそばだつて立つてゐるそのうしろは、無論膽吹の本山ですが、前はどうでせう、ずつと大スロープに尾を引いた淺井坂田の里を一迂りに琵琶の湖まで迂つた大景。

琵琶湖が眼の下に胴面を押し開いてゐる、さうして四圍の山が赤外線で引き立てたやうに常日の眺めとは一層に峻巖に湧き立つてゐるので、琵琶湖そのものがさながらアルプス地帯の山中湖を見るやうに澄み渡り、このそゞり立つ四圍の山々、谷々、村々、里々は呼

べば答へんとする處に招き寄せられてゐる。

沖の島、多景島、白石——それから竹生島の間も、著しく引き寄せられて、長命寺の鼻から何れも飛ばば一またぎの飛石になつてゐる。

比良も比叡も普通見るところよりは少しく四五倍の高さを増して手をつなぎ合つてこちらへ當面に向つてゐる、堅田の御堂も、唐崎の松も、はつきりと眼の前に浮び上つて來てゐる。

三井、阪本、大津、膳所、瀬田の唐橋と石山寺が盆景の細工のやうに鮮かに點綴されてゐる。

針のやうに、そこに突立つてゐる物影は、これ等の四周の山水を見めぐらすのでなく、眼前の大スロープが湖水へ向つて迂り込まうとするある一點に眼を注いで居りました、他の部分の山川草木はすべて眠つてゐるのに、そこばかりは夥しい火だ、家々の軒が火を點じてゐるのみではない、町々、辻々には多分盛んな篝火が夜明かし焚かれつゝあると見える。その處はまさに長濱の市街地であります、市街地であればこそ他の山村水廓とは一きは

目立つて火影の赤々と輝くのは當然ではあるが、それにしても今晚のは明る過ぎる、もし、もの日か祭禮かであるならばそれに準じての物音がこゝまでも賑かに響いて來てよい道理ではあるが、さういふものゝけはひは少しも無くて、静寂の町々辻々に篝火だけが斯くも夥しく焚きなされてゐるといふことは、事それが、どうしても何かの非常時を示してゐないことはない。

今晚、何かあの長濱の町に於て、特に非常警戒すべき出來事か或ひはその暗示。突立つた物影は、一心にその町一杯の火の光を見詰めたまふ、容易に動かうとはしませんでした、斯くばかり熱心に長濱の市街地方面をのみ凝視してゐる處を以て見れば、その目指すところの目的は、彼の長濱の町の辻にあるらしい。

つまり、上平館の間から此の遊魂は長濱の人里を慕うて下り行かんとしてこゝまで漂うて來て、こゝで暫く待機の姿勢をとつて、さうして、虎視眈々として、長濱の町の辻に於ける獲物に視ひをつけてゐると見れば見られないこともない。

前例によると、斯ういふ待機の姿勢には、危険きはまりなき事變が豫想される、その昔

甲府城下の闇の夜半の例を以てしても。

さすがに長濱の町の人々はもう先刻心得たもので、それ故にこそ、あの通り晝の如く町
町辻々の隅々まで、篝火を焚いてゐる、して見ると、虎視眈々たる物影も迂濶には、足を
踏み下ろせない道理です。

長濱の町の辻の方にはかり氣をとられてゐてはいけない——丁度こゝに突立つて虎視眈
々たる物影が、最初たどつて来た方面の道から、春照からの表參道を外れてお中道かと疑
はれたそれと同じ道を、こちらへ向つて平和な會話の音をさせながらたどくと歩み來る
たつた一つの提灯がありました。

「お母さん、あれが長濱の町ですか」

「さうです」

「篝火が盛んに燃えてゐますね、あれ陣鉦陣大鼓の音も聞えるではありませんか」

「さあ、お前、あれにつれ、あんまり勇み足になつてはいけませんよ、勇士は如何に心の
逸る時でも足許を忘れるものではありません」

四十三

その話ながら來る場所が、こちらの突立つてゐる覆面の人に、追々近く追つて來るので
す。

こちらでは、その人の話し聲も提灯の光も、それがだん／＼近寄つて來ることも、先刻
御承知の筈なんだが、あちらではこゝに此の人のゐることを想像だもしてゐないことは確
かです、よし、鼻を突き合すやうな處まで近づいて來たとしたところが、闇の空氣の中に
この通り覆面の異装で立つてゐられては氣のつく筈はないのです、斯ういふ場合にこそ、あ
の先刻のセント・エルモス・ファイアーが氣を利かして燃え出してくれ、ばいゝのに。

こちらは先刻承知の上だからいゝけれども、先方が可哀相です、かう漂々と近づいて來
て提灯を持つてゐることだから、鉢合せまでもなるまいけれど、まかり間違つてあの長
いものゝ鞘にでも觸らうものなら、いや鞘に觸らないまでも、提灯の光のとよく距離にま
で引寄せられて來て、ハツと氣がついたのではもう遅い。

斯ういふ場合には、こちらに好意があらば空咳からせきをすとか、生あくびをすとか何とかして、相當、先方に豫備認識を與へて、他意なきことを表明してやる方法を講ずるのが隣人の義務なのです、處が、こちらには一向にその邊の好意の持合せがないと見え、先方は遠慮なく近づき迫つて来て、光は薄いながら提灯の灯の届く距離の間で、早くも異風ひふうを氣取つてしまひました。

「おやく、どなたかおいでなされますな」

氣の弱いものと、この際、これだけの事態でもう口が利けなくなつて腰を抜かし兼ねまじき場合であつたのですが、先方はたしかにこちらの異風を認めて、しかとその地點に踏み止まつたにかゝはらず、意外なのは、それが女の聲で、しかも存外しつかりして地に着いてゐるのは、その足許だけではありません、その聲だけで判断しても、確かりしてはゐるけれども女の聲には相違ないが決してお雪ちゃんやお銀様のやうな音調いんあひや色合いろあひの聲ではありません、寧ろ良妻とか賢母とかいふべき性質のしつかりした調子で、

「どなたかそれにおいでなされますな」

と、言葉をかけたのですが、こちらは無言でした、こちらからすべき筈の豫備認識を以て隣人の義務を果さないのみならず、先方からの挨拶にも答へないといふのは非禮を極めてゐる、といふよりは害心をいだいてゐると斷定してもさしつかへ無いでせう、處が賢母としての今の女の人の後ろに、清くして力のある子供の聲が続いて起りました。

「お母さん、誰かゐるの」

「あゝ、それに、どなたかお出でになります」

そこで一旦踏み止まつて多少の躊躇をしたけれども、それが済むと、この母と子は合點をしてその無言で突立つた黒い姿の前をずん／＼と通り抜けにかゝりました。

何でもないことのやうですが、それは可なり大膽不敵な舉動と云はなければなりません。繰り返して言へば自分たちは禮儀をもつて一應挨拶を試みたのに先方は、その挨拶を返さないのみか、道路の眞中よりは少し後ろへ寄つてゐるにはゐるらしいが、この場合眞中に立ちはだかつてゐると見て差支ない、それを一步も譲らうとさへしないのです、聽覺の全然喪失した不具の人でない以上、たしかにこちらに對して寸毫も好意を持つてゐないも

のゝ態度、しかも、篤と闇を透して見れば覆面をして長い二つの、觸らば斬るものをさして突立つてゐるのでから、無氣味といふことの以上を通り越して害意もしくは殺意をさしはさんだ悪人と見るのが至當なのです、しかるにその前を一應の挨拶だけで平氣で子供を連れて通り抜けようとするのは、毒蛇の口へ身を運び入れるのと同様の振舞なのであります。

而も母の方は女の事であり子は道中差にしては長いのを一本差してゐるにはあるが、これとても通常の旅の用心で、それ以上に二人には何等の武裝といふべき程のものが施されてあるではありません。

併し、無心といふものゝ境涯こそは、有ゆる無氣味に超越すると見え、この母と子は、すらくとこの危険極まる存在物の立ちはだかりの前を通り過ぎて極めて安祥として二三間向うへ離れますと、

「どこへ行くのです？」

この時、物靜かに、はじめて發音したのはこちらの無氣味極まる黒い姿の存在物であり

ました。

「は？」

と、また踏みとどまつてこちらへ向きながら返答した賢母は、言葉は無論足もとに至るまで前同様少しの狼狽さへ見えません。

「長濱までまゐりまする」

行先きまでをはつきと名乗りました。

「長濱へ、長濱の町では今晚何か、物騒がしいやうです」

「はい、陣觸れがございます」

「陣觸れが」

「はい、それであの通り轡を焚いてゐるのであります」

「は、あ、それはさうと拙者も、その長濱まで参りたいと存するのだが、道がちと不案内でしてな、御一緒に願はれまいか」

黒い姿は存外靜かに物やさしい頼みぶりでしたけれども、それだけに何處か、つめたい

處があり一層無氣味なる物言ひと受け取れないではないが、提灯の賢母は一向物に疑ひを置くことを知らぬ人と見えて、

「それはく、長濱はあの通りつい眼の下に見えて居りますが、こゝからは、又道順といふものもござりまして、それは私共がよろしく心得て居りまする故失禮ながら御案内をいたませう」

「では頼みませうか」

そこで、提灯がまた動き出すと、黒い姿もむくくと動いて来て母と子との間に割り込む——といふよりは二人が中を開いて、この人を迎へるやうな態度をとり、そこで提灯の母が先きに十二三になる驟々しい男の子が殿しんがりといふ隊形になりました。

しかしまた、これでは送り狼を中に取り圍んで歩き出したやうなもので、一つあやまれば二つ共一口に食はれてしまひはしないか、事實上、さういふ隊形になつてゐながら、氣のいゝ母と子は一向懸念も頓着も置かないのは、送り狼そのものを眼中に置かぬ狼以上虎豹の勇に恃むところがあるか、さうでなければ、全然、人を信ずることの外には人を疑

ふといふことを知らぬ太古の民に似たる悠長なる平民に相違ない。

そこでこの三箇が相擁して膽吹から長濱道へ向けてそろり／＼と歩き出しました。

さうして、また途中極めて心置きなき問答が取り交はされました。

「どちらからおいでなされた」

と黒い姿の方は相變らず存外打ちとけた話しかけぶりでした、提灯の賢母は最初から明

けつ放しの調子で、

「尾張の國の中村から参りました」

「尾張の中村」

「はい」

「それは随分と遠方ではござらぬか」

「左様でございます、こゝは近江の國、美濃の國を一つ中にさし挟んで、これまで参りました」

ついで、この邊の里の女童こどもの夜明道と心得てゐたが、尾張の中村から三ヶ國をかけての

旅路とはちよつと案外であつた。

「それはく、なかく遠方からお出でだな、さうして長濱へは何の御用で」と黒い姿――

「あれに親戚の者が居りました」

「親戚をたづねてお出でなのですか」

「はい、木下藤吉郎と申します、あれが、今、長濱に居りまして、わたくしの従妹の連れ合になつて居りますので」

「木下藤吉郎」

聞いたやうな名だ！ と、黒い姿が思はず小首を傾けました。

「はい、その従妹の連れ合が、今大そう出世を致しまして江州の長濱で、五萬貫の領分を捧つやうになりました」

「冗談ぢやない」

と黒い姿もさすがに桁の違つた母の人の言ひ分に驚かされ呆れさせられたやうに投げ出

して云ふと、賢母は、

「いゝえ、冗談ではございません、昨晩からの陣觸れもあの袴も、皆んなそのわたしのいとこの連れ合がさせてゐる業なのでござります」

「途方も無い、だが、もう一べんその人の名を云つて見て下さい」

「木下藤吉郎と申します」

「は、は、は、何を云はれる、木下藤吉郎、それは太閤秀吉の前名ではござらぬか」

「別に、こちらの方では、太閤と申しましたか秀吉と申しましたかそのことはわたくし遠はよく存じませぬが、わたくしの従妹の連れ合木下藤吉郎が大そう出世を致しまして、只今、あの江州長濱で五萬貫の領分をいたゞいてゐるのは確かなのでござります、そこへ、わたくしはこの子を連れて尾張の中村から訪ねて参る途中なのでござります」

賢母らしい人は信じきつて、斯う云ふのですから、義理にも冗談とは受取れないので、馬鹿々々しいと思ひながら、覆面の黒い姿はそのまゝでもう一步進んで見ました。

「そんならさうとして、さて、あなた方は何の目的でそれをたづねてお出でになる」

と駄目を押すやうにして見ると、

二七四

「左様でござります、その藤吉郎に、此の子供の身を託したいと思ひまして、これはわたくしのせがれでござりますが、御覽下さいませ」

と云つて、母なる人は後を振り返り踏み止まつてその提灯を、殿しんがりにゐる十二三の男の子の面に突き出しました。

そこで、この子の面目が照らし出され、その突きかざした提灯がぐるりと廻ると、先づ最も鮮やかに浮き出したのは提灯に描かれた蛇じやの目と枯梗きやうの比翼ひよくに置かれた紋所でありました。

四十四

その提灯の光りに照らし出された十二三の少年は臆するところのない、沈男しんなんの影を宿した面を向けて、しとやかに立つて居りました。

それを見て、黒い姿は、何か神妙な氣持にうたれたと見え、

「どうです、この邊で一休みして參らうではござらぬか——あなた方は何か御由緒ごゆじよもありさうな人達、お身の上を、ゆつくり承つて見たいものだ」

と、その邊の然るべき路傍に立ちよつて見ると、

「はい、まだ夜明けには間もござりますから、では一つこの邊で一休みさせていたゞいて、ゆつくりあれへ參ることに致しませう、お前そこに大きな石がある、それをこちらへお据ゑ申しな」

と母からいひつけられると、沈男な面影を備へた少年は、自分の身體に餘るほどの大きさの路傍の巖石を、易々と轉がし出して來て黒い人の爲に席を設けました。

さうして、母子は程よい處の木の根方ねかたへ腰を下ろして提灯は傍への木の枝へ程よく吊り下げ、さうして心安げに話をするくつろぎになりました。

「この子は虎之助と申しまして、柄は大きくござりますが、これで當年十三歳なのでござります、今日まで故郷の尾張の中村で育てましたが、いつまでも草深い處に遊ばして置くのもどうかと思ひまして、思切つてこちらへ連れて參りまして、藤吉郎の處へ預けて、も

のにしようと思ひまして」

「お父さんはどうしました」

「この子の父と申しますのが、あなた、彈正右衛門兵衛と申しまして、つまり、わたくしの連れ合なのでございますが、三十八歳の時にこれが三歳の年に致してしまひました」

「それは〜」

「それから、斯うして今日まで、後家の手一つで育て上げはいたしました。後家つ子だからと人に笑はれるのは残念でございますし、それに、田舎に置きましては武士の行儀作法をも覚えさせることは出来ませんから、思ひ切つて連れて参りました。父の彈正さへ生きて居りますれば、わたくしが斯うして引き廻さなくも宜しいのでございますが……」

「は、あ、そなたのお連れ合、そのお子さんの父親も彈正と申されましたか、實は拙者の父も同じ名を名乗つて居りました」

「さ様でござりましたか、それは、どうやらお懐かしいことでございます、何にいたしましても男の子は男親につけませんと、母親ばかりではどうしても縁が足りません、それに

あなた、此の子がさう申してはなんでござりますが、生れつき心が優しく、武勇の氣が強いのでござりまして、親の欲目とお笑ひになるかも知れませんが、わたくしとしては相當に見込をつけたのでござりました」

「は、あ——」

「わが子を賞めるは馬鹿のうちと申しますが、まあ、お聞き下さいまし、八歳の年の時でござりました、村の子供と大勢して遊んで居りますと、そのうちの一人が、過つて井戸へ落ちてしまつたのでござります、さう致しますと子供達のことゝて皆んな驚き、あはてふためいてどうしようといふ氣にもならないで居りますと、この虎之助がまづ急いで自分の着物を脱いで裸になると共に、子供達皆んなに同じやうに裸にならせて、その帯を集めて結び合せて長くして、子供達に『君達はこの端を上で持つて居れ、わたしは下へ降りて行つて助けて来る』といつて、自分はその帯をつかまへて井戸の底へ下つて行き、溺れてゐる子供を抱き上げ無事に救つて上りました、それからまた……」

「どうぞ、御遠慮無くお聞かせ下さい、たしかに凡物ではありませんな、八歳の年でその

危急の場合にそれだけの沈勇があるとは、さういふお話は決して子供自慢には響きませぬ、自慢としてもさういふ自慢なら有ゆる親の口から聞かせてもらひたい位です」

「では、お言葉に甘へて、なほ申上げることゝ致しませう、これが十歳の時でござりました、家へ盗賊が入りましてな、わたくしも内心はゾツといたしました、許しては置けないが、母子が怪我をしてもさせてもならない、どうしようかと思案して居りますうちに、これがかくくと立つて何をいたすかと思すと、村のお祭禮の時に用ひます鬼の面が家にござりました、それを手にとると自分の面へ斯ういふ風にかぶりまして、さうしてそのまま盗賊の前へ向つて行つたのでござります、不意を打たれて驚いたのは盗賊でござりました、鬼の面とは知らず眼前に異形のものが現はれ出たものでござりますから度々失つて、たちく〜といたしました處を、この子が一刀に斬つて捨て〜しまひました」

「はゝあ、それはいよゝゝ凡人には及び難い」

「さういふ氣象の子供でござりますから、どの道、これは草深い處に置くよりも武士として出世させるのが道だと思ひまして、幸に此の長濱に親戚の藤吉郎が居りますものでござ

いますから」

「どうです、その藤吉郎殿にはこの子が育てられますかな」

「それはもう、さう申しては、これはまた親類自慢とお笑ひになるでせうが、あの藤吉郎がまた決して凡物ではござりませぬ、この子を引廻し、使ひこなすのはあれに限つたものでござります——一體、人を見て使ふといふことも器量の要る仕事でござりますけれども、使はれる方も亦主と頼む人をよく〜見込んでかゝらなければならぬのでござりますが、この點に置きましては、藤吉郎よりは虎之助の方がどの位惠まれてゐるかわかりせん、そこへ行くとわたし達母子は幸運者でござります、かうして、易々と藤吉郎に頼みさへすれば大安心でござりますが、藤吉郎が主人を見立てゝ、この人ならばと頼み込むまでには容易なことではござりませんでした、もと〜尾張中村の矚しい土民生れでござりますから、一族郷黨に優れた取立人があるといふわけではござりませぬし、自分の身に何の箔がついてゐるわけではござりませぬ、乞食同様になつて諸國を流浪ろくろの揚句が、漸くこの人ならばと思ふ主人を自分で見出しまして、自分でその人のところへ押かけ奉公を致しましてやつ

と草履取に召し使はれましたのが運のはじめでございました、藤吉郎はあれで天下第一等の苦勞人でございます、世間では天下第一等の幸運者のやうにも申しますが、わたくし遠から申しますと、天下第一等の苦勞人と申すはかほござりませぬ、幸運を羨む人は多くございますが、苦勞のことはあんまり認めてやるものがございます」

「成程——」

「あなた様も御承知でございます、矢張り尾張の出身ではございますが、身分は藤吉郎などゝは比べものにならない家柄、今は安土の主織田信長でございます——織田殿を主人に見立てたばかりに藤吉郎も今は江州長濱で五萬貫の身上になりました」

「さうするとそなたのそのお子さんも、やがて一國一城のあるじになり兼ねぬ運命を持つておるでだ」

「はい、親類から一人エライのが出て居りますと何かにつけて仕合せでございます」

「その通り、若し又間違つて親類から一人悪い奴でも出ようものなら一家一まきが災難だ」
「さ嫌でございます、それ故どうか此の子もすんなりと立身出世を致させたいものでござ

います、草葉の蔭に居りますこの子の父親彈正に對しまして、わたくしのつとめでござります——承れば、あなた様のお父上も彈正様とお名乗り遊ばされましたさうで、やはり御成人遊ばした後までもあなた様の立身出世をお祈りになつてゐらつしやらぬ日とてございますまい、わたくしが、どうやらこの子を今日まで育て上げましたのも、亡き連れ合の魂魄が守護して呉れましたそのお蔭とばかり思つて居ります」

「さうおつしやられると恐縮です、あなたは斯うして立派にすんなりとお子さんを育て上げて立身出世を亡き連れ合としてのこのお子さんの父君に誓願して居られるが、拙者と來た日には、父の名こそ同じ彈正ではあるが——子の成れの果はお話になりません」

「否、さ様なことはいけません、併し親となつて見ますと、頑是ない時は頑是ない時のやうに、よく行けばよいやうに、悪く外れればそのやうに、もし又立身出世いたしましたからとて、それで心の靜まるわけのものではございません」

「では、何の爲に立身出世をさせるのですか」

「ホ、ホ、ホ、ホ」

と龍之助から問ひつめられた賢母の人は愛想笑ひをして、

「さういふむづかしい事をお尋ねになつては困ります、今のわたくしは、たゞ子供に立身出世をさせたい一心だけでございまして、立身すればするやうに苦勞くろうが増すものか減るものか、その事などは實は考へてゐないのでございまして、それはさうと、もう可なり時がうつりました、それではそろ／＼長濱へ向つて出かけることゝ致しませう」

と云つて、木の枝に程よく吊した提灯を取り下ろすべく、賢母が腰を上げて手をのばしました。

賢母が提灯を手にとらうとすると、その後ろで不意に、

「ホ、ホ、ホ、ホ」

と笑ふ聲がしました。

三人が云ひ合はせたやうに、そちらを見やると、水門の水口のところに、腰打ちかけて此方に向いてゐる一人の白い姿があるのです。

最初は繪に見る關寺小町せきでらこまちとか、卒塔婆小町そとばこまちとかいふものではないかと怪しまれたほど、

その形がよくくわめん盤面に見えるそれと似通つて居りました。

無論、女です、白い着物の裾を長く曳いて、白い帯に白い頭巾で目ばかりを出して、不意に、

「ホ、ホ、ホ、ホ」

と、笑ひかけたものですが、その笑ひ聲がいかにも軟かで、さうして美しさと若さを含んで居りました。

卒塔婆小町そとばこまち? と疑つたのは、その姿を見た瞬間の印象だけでして、その聲を聞くと、どうして、ずつと若い美しい水々しさを持つてゐることに於て、やはりその頭巾の中の主も、聲と同じやうな若さと美しさとそれから和さを持つてゐる人であることは疑ふまでもないほです。

「どなたでございますか」

斯う不意を打たれても、賢母はあまり狼狽ろうたいしませんで、さうして物靜かに、おとなひ返したものです。



二八五



二八四

「御免遊ばせ、失禮とは存じつゝも、あなた様方のお話を、途中でおさまたげするの何と思ひまして、こらで伺つて居りました」

「少しも存じ上げませんでした、何處からお越しになりました」

「都からのぼつて参りましたが、實はこちらがわたくしの故郷なのでございます」

「さ様でゐらつしやいますか」

こゝで、兩女の受け渡しははじまりました。

最初の婦人を、假に賢母けんぼと名づけ、後なる白衣の婦人を美人びじんと呼びませう。

「あなた様には御子息様をお連れになつて、尾張の中村からお越し遊ばされましたさうな」と美人が押し返してたづねると、賢母が直ちに答へました。

「はい、お聞きの通りでございます」

「さうして、あの長濱に御親類のお方が、大そう出世を遊ばしておるでございませう。それへ御子息をたのみにお出での由を承りましたが」

「はい、仰せの通りでございます」

「つきましては、甚だ、不躰ふたいでございますが、わたくしの考へだけを申し上げますと、それはおやめになつた方がお爲かと考へますのでございますが……」

「何と仰せになりましたか」

「はい、御子息様を御親類の方へお連れ遊ばして出世をおさせ申すことは、おやめになつた方がおよろしくはございませんかと、わたくしはさ様に申上げたのでございます」

「では、わたくし達が長濱へ参るのは悪いとの仰せでございますか」

「その通りでございます、御子息様をお連れ戻しになつて、尾張の中村へお歸りになるのが、あなた様方のお爲かと存じまして」

「それは一たいどういふわけでございませう」

「まあ、お聞き遊ばせ」

水門に腰かけてゐる美人は、提灯を提げて聊か立ち煩つてゐる賢母に向つてあらためて物語をはじめました。

「わたくしは、出世をすることが必ずしも人の幸福ではないと覺えて居ります、幸福で

ないのみならず、出世をするのは人間の最も大きな不幸と災禍の門を入るものと覺らずには居られないのでございます、それ故に、あなた様方の、只今のお話をこゝでお聞き過しにするに忍びないのでございまして」

「異なことをおつしやいます、それは不祥なお言葉でございます」

「折角の御子息の門出にケチをつけるといふつもりは毛頭ございません、身につまされましたものでございますから——つまり、わたくしといふものがその出世にあやまられた一つの見せしめなんでございまして」

「一體、あなた様はどなたでらつしやいますか」

賢母は美人の云ひ過しの奇怪なるに、つひその身の上の素性を問ひたゞさざるを得ない氣持にさせられたやうです。

さうすると、美人はそれに答へないで、おもむろに横の方を向きながら、物々しい聲で朗詠のやうな調子をはじめました、男性を思はせる位の朗々たる音吐でしたが、その調子の綴を聞いてみると、まさに一首の歌です。

萌え出るも、枯るゝも、同じ野邊の草
いづれか、秋に、逢はで、果つべき

四十五

その時、賢母は聊か手持無沙汰に見えました、歌を以つて答へられたけれど、自分には歌をもつて之れに應ずる素養が缺けてゐることを恥づるとしも見えないけれど、さて、その突然なる朗詠に向つて、何と挨拶をしていゝか、ちよつと戸惑ひをした形であると、

「お母さん——」

と、意外なるところから助け船ではないが、ちよつとばつの悪くなつた氣合を補つたのは同伴の沈勇なる少年でありました。

「お母さん、この方は祇王様ぢやございませんか」

「何ですか」

「あの、六波羅の祇王様なんぞせう」

賢母が少年の言葉に駄目を押ししていると、美人がそれを聞いてまた朗かに笑ひました。

「ホ、ホ、ホ、坊ちゃん、あなたはよくわたくしを御存知でしたね」

「お母さん、あの、ほら、平家物語のはじめの方にある——」

「あゝ」

と賢母も、はじめてうなづきました、さうすると美人はわが意を得たりとばかり、

「おわかりになりましたね、わたくしが六波羅の平清盛の寵愛を受けてゐた祇王と申す女なのでございます」

「あゝ、さ様でございましたか、つい、存ぜぬ事故失禮をいたしました」

「失禮は私こそ、斯様に身許がはつきりと致して参りました上は、なほ包まずに申上げてしまひませう、都へ出て清盛の寵愛を一身にあつめて居りました、わたくしの出生地と申すのは、この近江の國、この土地の生れなのでございます」

「さ様でございましたか、そのこともつい存じませぬことで、都の御出生とばかり存じ上

げて居りました」

「都へ出て、浮川竹に白拍子のはかないつとめをいたして居りますうちに、妹の祇女とともに、あの入道殿のお見出しにあづかつて寵愛を一身にうけるやうになりました」

「入道殿とおつしやいますのは」

「それは、あの清盛のことでございます、その時は太政大臣の位に登つて居りました」

「あゝ、よくわかりました」

「その當座といふものは、わたくし達が天下の女といふ女の幸福を一人で占めたものゝやうに、世間から、羨まれもしあがめられもいたしました、天下を掌のうちに握る太政入道はたとひ王侯將相のお言葉はお用ひなくともわたくし達の願ひは皆んな聞いて下さいました、御一門の方さへ憚つて居ります時に、わたくし達は思ひ切つて甘えもいたし、我儘もいたして許されました、それほどでございますから月卿雲客、名將勇士たち、皆わたくし達に取り入つて入道殿の御前をつくろはんと致しました、わたくし達の一家眷族の末までも多分の恩賞がございました、都の浮れ女は、せめて、わたくし達の幸福にあやかりたいと

名前までも祇一、祇二、祇福、祇徳など争つて改めて見たものでございます、氏無くして王の輿たまこしと申しまする本文通り、わたくし達が一代の女の出世頭として羨望の的とされて居りましたが、そのうち、加賀の國からあの佛御前ほつごぜんが出てまゐりましてからといふものは、わたくし達の運命は、御承知の通り哀れなものでございました」

と云つて、美人はこゝで聲を曇らせて、面を伏せたやうでしたがまた向き直つて、「佛も昔は凡夫なり

われらも後には佛なり

いづれも佛性具せる身を

隔つるのみこそ悲しけれ

それは悲しい調子に歌ひ出されて來ましたが、また急に晴々しい言葉になつて、「愚痴を申上げて相済みません、榮枯盛衰は世の常でございますから、歎いたとて詮のないことでございます、佛御前に寵愛を奪はれてから後の、わたくし達の運命といふものは、御承知の通りでございます、すべての世界も人情も皆んな一變してしまひました

が、たゞ一つ變らぬものとして御覽下さいませ、此の井堰の水の色を……」
と云つて、美人は後ろを顧みて漫々たる池水を指し、

「わたくし達の有ゆる榮耀榮華のうちに、たゞ一つこれだけが残りました」

と云つて、美人は相變らず水門に腰をかけた卒塔婆小町のやうな姿勢でうしろの池水を指しながら、

「この池と、この井堰と、この用水とは、わたくしが六波羅時代に掘られたものでございませ、それは、わたくしの生れ故郷の人達が水に不足して歎くところから、わたくしが費用を出して、この池と塘と堀とをつつかりこしらへさせてやりました、なに、天下の相國の寵愛を一身に集めたその時のわたくし達の運勢で申しますと、こんなことは數にも入らないほどの仕事でございました、わたくしはたゞ、ほんのお義理をしてやる程度の思ひで、自分では忘れてしまつてゐた位の仕事で、どうぞございませう、今日になつて見ると、わたくしの一生のうちの最も大きな、さうして唯一一つの功德の記念となつて永久に残されることになりました」

美人は、今となつてはじめてその當初には思ひも設けなかつた自分のした仕事のうちの最もさゝやかなことの仕事の一つに、自分の有ゆる生活の最も大きな意義を見出したかの如く、惚々とこの池の水を見てゐましたが、やをら立ち上つて池のほとりをさすらひはじめました。

「坊ちゃん、此方へゐらつしやいな」

しなやかな手を舉げて沈勇な少年を小手招きをするのです。

少年は、そのしなやかな誘ひに應じて行きたくもあるし、母の手前をも憚かつてゐると、美人の姿は飄々として池畔をあちらへ遠ざかり行きながら、その面影と聲とははつきりして、

「ねえ、坊ちゃん、あなたこれから頼らうとなさる御親類の方が、この後たとひ太政大臣におなり遊ばし、或ひは攝政關白の位にお上りになりまして、従つて、あなたが大名公家に立身なさらうとも、それは、あなたの幸福ではありませんよ、本當の幸福を思ふならば、これから故郷の中村とやらへお歸りになつて、さうして朝晩に斯うしてお池と用水と井堰

とを見守つて一生をお送りなさい、さうでなければわたくしと一諸に嵯峨の奥といふところへいらつしやい、そこにはいと静かにわたし達母子が住んでゐるのみならず、今ではあの佛御前も一族の中の一人となりました、丁度あなた位の少年が何かにつけて一人欲しいと思つてゐたところなんです——よかつたらいらつしやい、ね」

言葉が餘音を引いて姿が隠れてしまひました、水門の蔭に没したやうでもあり、水の底に沈んでしまつたやうでもあります。

賢母も少年も惜しさうにその池の面を見つめて居りましたが、もう、いづれの處からも再び姿を現はす氣色はありませんでした。

それを見てゐるうちに、今まで明く點されてゐた蛇の目枯梗の提灯がいつの間にかふつと消えて居りました、それが消えると賢母の姿も沈勇少年の姿もなく、眞暗闇、太平寺の門前の庭に針のやうに突立つてゐる例の黒い姿が一つあるばかり。

比良ヶ嶽の方を見上げると、時ならぬ新月が中空にかゝつてゐる、上平館の方を見た時に青い火が一つ、それは例のセント・エルモス・ファイヤーではない、青い火の塊りが一つふ

わりと飛んで一定の距離に淡い筋を曳いたかと思ふと暫くにして消えてしまひました、多分、俗に人魂ひとたまとでもいふものなんぞでせう。

二九六

四十六

それはさて置いて、残されたりし上平館の松の丸の爐邊で、今、米友がスワと、爐邊の席を蹴つて立ち上りました。

さうして、自在も鐵瓶も大またぎに突破して跳り込んだのは、最前から問題の納戸なるとの間、これを奥の間おくまとも呼んだところの間であります、納戸と奥の間とは違ふけれども、この際爐邊と台所とを標準にすれば何れも構造的に奥の方に當るのですから、奥の間とも納戸の間とも、この際に限つて呼んで置きませう。

そこへ米友が一息に飛び込んで行つて、

「お、お雪ちゃん、どうしたい、お雪ちゃ——ん」

寝てゐる蒲團の中から、お雪ちゃんの身體を引きずり起して、兩方の腕で掻き抱いてむ

やみにゆすぶりました。

ところが、お雪ちゃんには一向返事がなく、返事の代りに聞くも苦しきやうな唸り聲がもるばかりです。

「お雪ちゃん、どうしたんだつてええ、しつかりしてくんなよ」

と、米友は二たび三たび抱き上げたお雪ちゃんを烈しくゆすぶりました。

この際、米友としては、ゆすぶつて見るより外の藝當はなかつたのでせう、事が全く不意に出たものですから、本人をゆすぶつて本人に事の仔細をたしかめて見るより外には詮方がない、その本人にたしかめて見る以前に本人の正氣を回復してかゝらなければならぬ。

「お雪ちゃ——ん、お雪さん、しつかりしろやい」

この烈しい米友のゆすぶりに對して、お雪ちゃんの挨拶としては何もなく、少し間を置いて、さうして恐ろしい唸りの聲ばかりで、今度はその唸り聲さへ漸く低く勢を失つて來て、その身體までが見る／＼彈力を缺いて、さうしてぐつたり米友の身體の上に崩れか

かるやうなものです。

二九八

凡そ米友としては、若い娘のかういつた態度を、今までにこれで二度まで見せつけられました、その一つは、申すまでもなく、本所の相生町の老女の家で行はれた幼な馴染の間の生別死別の悲劇がそれでありました。

あの時は、天地が目の前ででんぐり返つたと同様で、何が何んだかわからなくなつてしまつたが、でも、死ぬ人は十分覺悟の前でありさうして枕許にはお松さんといふ日本一頼みになる人がついてゐて一から十まで行き届いた臨終ぶりといふべきものでありました。

然るに今晚のことは、まるつきり違ふ、お雪ちゃんを介抱すべく誰もゐやしない、それは、その筈で、今のさきまで元氣でゐた若いお雪ちゃんのことだから、誰も急變を豫想してゐる筈のものはないのに突發的にこの急變なのです、米友と雖も全く周章狼狽せざるを得ません。

周章狼狽は極めてはゐるけれども、全く失神迷亂してゐるわけではない、その點に於ては寧ろ相生町の時の天地が眼の前ででんぐり返つて自分の立つ所、ゐる所がわからなくな

つたとは違つて何が何だか事の順序を見きはめるだけの餘裕はあつたのです。

まづあの爐邊から、自在と鐵瓶とを突破して一氣にこの室へ走せつけしめられた異常といふのは、この室から起つたところのお雪ちゃんの異様な叫び——ではない唸り聲がもとなのであります。

その一種異様な唸り聲を聞きつけると、米友が例の早業で一氣に此處へ走せつけて來ての仕事が、前いふ通り、寢てゐる蒲團の中からお雪ちゃんの身體をひきずり起して、兩方の腕で掻き抱いてむやみにゆすぶり立てることでありました、さうして續けさまにその名を呼んで、まづ正氣を回復せしめて、事の理由をたづね問はんとするものであります。

併し、その手ごたへが一向薄弱で、却つてますます消極的にくづ折れて行く有様に周章狼狽をはじめたのは見らるゝ通りであります、この非常の際にも、たゞ一つ安心なのは、どう調べてもお雪ちゃんの身體の外部に聊かの損傷のないといふことであります。

斬られてゐるのでもなければ、締められてゐたといふ痕跡もないし、毒を飲ませられたといふ形跡もないことですから、事態はどうしても内臓の故障から來てゐるらしい、女子

に特有な頼だとか血の道だとかいつたやうな種類、お雪ちゃんがてんかん持だといふことは聞かないが、さうでなければ何か非常に驚愕すべき事でもあつて一時知覚神経の全部を喪失するほどに強襲壓倒させられてしまつたのだらう。

その邊にだけは辛うじて得心を持ち得たが、事體の危急は少しも氣の許せるものではありません、併し、前にいふ通り米友としての醫當は、烈しくゆすぶつて見るより外には爲さん術を知らない、たゞ一つ知つてゐる、それは柔術じゆうじゆつの活法かつぱふから來てゐる處あての當の手でした、けれども今の米友としてはその活法をこゝでお雪ちゃんに施して見ようとの機轉おてまも利かないほどに狼狽を極めて居りました、またその機轉が利いてゐたところで當身あてみや活法は施すべき時と相手とがある、今、この際このか弱い病源不明の者に向つて手荒い活法を試むることがいゝか悪いかの親切氣さへ手傳つたものですから、いよく手の出しようが無くなつたのです、そこで、いよく深くいよく強く、お雪ちゃんを抱き締めてしまつて、

「しつかりしろ、お雪べえ——」

幸にしてほんとに有るか無きかのさゝやかな希望の引かゝりを與へたのはこの時心持お

雪ちゃんの體の動きに少し力が見えました。

「しつかりしろ、しつかりしろよ、お雪ちゃん」

同じやうな事を繰り返して、米友が抱きしめてゆすぶる間に、有明ありあけながら行燈の灯は相當の光りをもつてゐたのです、その光りが蒼白くお雪ちゃんの面を照らしてゐるものからです、それで見ると死人同様な面の上に、ほんの心持唇だけを急がはしく動かしてゐるやうにも見える、それを見て取ると米友が眼めから鼻はなへ抜きました。

「うむ、さうか、さうか、水が欲しいか、水が飲のみみてえか、さうだらう、待ちな、待つてくんな」

恰もよし、枕許に水呑がある、それを、お雪ちゃんを抱きながらの米友がいざつて行つて片手をのばして引き寄せると、ちよつと考へてその水呑の口をお雪ちゃんの唇のところまで當てがつて見たがそれではどうにもならないと諦めると、思ひ切つて自分の口に當がつてグツと呑み込み、

「……………」

その口をお雪ちゃんの口に當てがつてグイ／＼と注ぎ込みました、普通の場合に於て斯ういふことは出来ないのです、普通の場合でなくとも、米友でなければ、斯ういふことを爲し得ない、爲し得たとしても、後に相當の誤解と羞恥とを拭ひ去れないものが残る憂ひはあるが、今の米友にはそんなことはてんで心頭にありません。

口移しに水を注ぎ込んだが、無論その注ぎ込んだ水の全部がお雪ちゃんの咽喉を通らうとは思はれないのですが、併し、本人もこの昏迷極まる状態のうちでありながら、たしかに水を呑まんと欲する意識だけは動いてみると見え、米友の口移しにした水の三分の二位は唇頭から溢れて頬と顎へ傳はつて流れ去るのですけれども、三分の一程度は口中へ入るのです、さうして、そのまた幾分か、口中に残り、幾分か、咽喉を通り得るものと見なければなりません。

米友は誰に憚ることもなく、また憚る必要もなく二度も三度もその給水作業を試みましたが、水が通じたといふよりも米友の神が通じたのでせう、慥かに見直した、もうこつちのものだ——といふ希望の光りが米友の意氣を壯にしました。

「だから、云はねえこつちやあねえ」

この時はもう烈しくゆすぶることをやめて、寝る子を母があやなすやうに米友のあしらひ方の手加減が變りました。

事實、それは米友の糖喜びではありませんした、お雪ちゃんは刻々に著しく元氣を恢復して行くことがあり／＼とわかります、米友はまた片手を伸ばして燈心を掻き立てるだけの餘裕を作つて見るとその増し加へられた火光が一層お雪ちゃんの氣分を引き立てたものに見せましたから、もうこつちのものといふ考へがいよ／＼確實になつて見ると米友としてもいよ／＼米友度胸が据つたのです。

とはいへ、稽古半ばで落された武術の修業者が、さめると共に元氣を回復して、直様相手に一戦を挑みかけるといふやうな現金なことはなく、まだ、決して自分の意志を表白し得るほどの程度にも達してゐないのですが、もうこつちのものといふ信念を米友に持たせることに於ては半平として動かすべからざるものがあつたのですから米友の取扱ひも一層和氣もありやみくもにゆすぶることは及ばない、ゆすぶつてはいけないのだ、安靜に寝か

して置いた方がいゝ、もと／＼外部に創傷のある出来ことではないのだし、長い間病氣で弱つてゐたといふ身體でもないのですから、安靜あんせいにして置いて、且つ冷えないやうにしてやりさへすればそれが何よりなのだといふ看護法の要領だけは米友の頭にうつゝて出来たものですからそのまゝ後生大事にお雪ちゃんをまた元の枕に寝かせながら、

「だから云はねえこつちやねえ、お前、あの男にどうかされたんだらう、あの男といふのは、お前が先生々々といつてかしづいてゐるあの盲めくらのことだ、ありや、お前魔物まものだぜ！」と云ひましたが、無論まだ口を利く自由さへ得てゐないお雪ちゃんが、この文句を聞き取れよう筈はありません、自然米友のいふことは獨り言になつてしまつてゐるのですが、聞かれてゐようとも聞かれてゐなからうとも獨り言であらうとも相手を前に置いての獨得のたんかであらうとも、米友としては云ふだけの事を云ひかけて途中でやめるわけには行かない。

「お前はこつちへ寝て、あの男は向うの屏風の中へ寝たんだらう、まさか一緒に寝るやうなことはありやしめえ、あんな人間の傍へ近寄らうとするのがあやまりなんだ、まあ怪我

がこれだけで済んだから幸福しあわせのやうなものなんだ、ところで、お前が珍らしがつてゐるあの人間は今はその屏風の蔭に寝ちやあるめえ、なあに、そこに寝てゐるぐれえなら世話はねえんだ、おいらでさへ、同じ座敷に寝てゐる毎晩のやうに出し抜かれた魔物なんだから、お雪ちゃんなんぞ一たまりもあるもんかよ」

あちらの枕屏風の外から中を見透すやうにして米友が斯う云ひました。

この屏風の向うに尋常に一組の夜具はのべてあるけれども、その中にもぬけの殻からだといふことを、米友は最初からちやんと見抜いてゐたのであります。

「ちえ！ 世話が焼ける奴等だなあ！」

何故か、米友は斯う云ひつゝもお雪ちゃんの寝顔をまたながめ直した途端、

「ジュー、シーブー」

といふ只ならぬ物音が最前の彼の爐邊で起りましたので、米友がまた、とつかはと突立つて、今度は、枕と屏風と水差とを突破してもとの爐邊へ向つて一直線に走りつけたのは成程急がしい、全く世話の焼けた話で、こちらの救急と看護と思ひやりで手も足らないで

ある處へ、あちらの一間で、
「ジュー、シーブー」

といふ只ならぬ物音、さながら、
「雨は降る／＼干物は濡れる、背中
ぢや餓鬼や泣く飯や焦げる」といふ
體たらくです。

四十七

その「ジュー、シーブー」といふ
只ならぬ物音は、それは人間の聲で
はないが、捨てゝ置けない。

斯うなつて見ると豫想しないこと
ではなかつた。つまり爐中へかけつ



放しにして置いた鐵瓶が燃えさしの
火力に煽られて米友の不在中に沸騰
をはじめ、それが下の爐炭中へたぎ
り落ちて灰神樂を始めたのですから、
この事は人の生命に及ぼす程の事では
なかつたのですが、やはり打ち捨て
てゝは置けない、それ故に、米友が
また忙がしく取つて返し、
「ちえッ！ あつちもこつちも世話
が焼き切れねえ」
米友が、その灰神樂を鎮靜せしめ
た途端に、目に觸れたのは、ついそ
こに太平樂で大いびきをかいてゐる



道庵先生の寢像ねぞうでありました、道庵の寢像を見ることは、今にはじまつたことではないが、此の場合これを見ると、米友がまたグツと一種の疝癪ぜんじやくにさはらざるを得ません。

人がかうしてまあ一生懸命に——全く生るか死ぬかで奔走してゐる一方には、灰神樂がチンパンカンパンをはじめるといふ非常時にこの後生樂ごせやうらくは何たることだ、酔興でこしらへた創だらけの面に大口を開いていゝ心持で寝こんでゐる、人間、どうしたら斯うも呑氣にじだらくに生きられるものか、おいらなんぞはそれからそれと夜も眠れねえで、身體が二つあつても三つあつても足りねえ世の中に、この先生と來ては、この後生樂だ。

「畜生！ どうするか見やあがれ！」といふやうな氣にもなつて見たが、さうかと云つてどうすることも出来ない、天性後生樂に生れて來た奴は仕合はせだ、人の心配する間をぐうぐう寝てゐられる、こんな奴が長生きするのだ、太々たいたいしいといふのか、それとも羨ましいといふのか、呆れ返つたものだ。

今更らそれを考へて、米友がボカンと呆れ返つてゐると其の裏から發止と思ひついたのは、

何の事だ！

この先生はお醫者ぢや無えか！

その酔つばらひのことばかりを考へて、遂に本業のことに思ひ及ばなかつた。

成ほど、この先生は醫者が本業である、さうして酔つばらひが副業である。

副業としての酔つばらひにかけては、手に負へないが、本業としてのお醫者様にかけては名人だ、少くとも、米友の経験する限りに於ては起死回生の神醫しんいに近い！

この名醫神醫を眼前にさし置いて何を自分が今までしてゐた！ 何が救急だ、何が看病だ！

ほんとうに馬鹿ぢやあ樂が出来ねえ！

と今度は米友が自分の頭腦の足らないことゝ氣轉の及ばないことの馬鹿さ加減を自分で冷笑しはじめました。

最初からこゝに氣がついてゐさへすれば、何を自分がお雪ちゃんをゆすぶつたり、締めつけたり、口うつしに水をくれてやつたり、また鐵瓶の野郎にまでチンパンカンパンを起

させたりする必要が何處にあるのだ。

血のめぐりの悪い奴に逢つちやあかなはねえ。

と米友が、またしても自分の低能ぶりを嘲けりきれない語調でせよら笑つて見ましたが、いつまでも自己冷嘲をつづけるのが能ではない、事の實行にとつかゝるまでのことだ、實行といふのは、この先生を起して、お雪ちゃんを完全に呼び生かした上に、將來の健康を保證せしめることだ、そこで米友が物靜かに道庵先生の枕許に走せ寄つて、

「先生！ 先生！ おいらの先生！ 起きて呉んな」

「ムニヤ、ムニヤ、ムニヤ」

「先生」

「ムニヤ、ムニヤ、ムニヤ」

「先生」

「ムニヤ、ムニヤ、ムニヤ」

再三呼んでも同じ言葉を繰り返した後に、小うるさいと思つたのかクルリと向きを換へ

てしまひました、詮方なく、米友がまた立つて歩んで、そちらへ直つて、さて、

「先生」

「ムニヤ、ムニヤ、ムニヤ」

「先生」

「ムニヤ、ムニヤ、ムニヤ」

「先生」

「ムニヤ、ムニヤ、ムニヤ」

やはり同一のたはことを繰り返して、こんどはまたクルリと元の方へと寝返りを打つての高いびきです。

詮方なく、米友がまたこちらへ立ち返つて、さうして、

「先生」

「ムニヤ——」

今度は一言でまた寝返りを打つて、あちらを向いてしまひましたから米友が勃然として

怒りをなしました。

三二二

ふざけてやがる、おいらが斯うして起してるのを承知してやがるんだ、承知の上でわざとムニヤ／＼と白ばつておいらをからかつて、あつちへ向いたりこつちへ向いたり——人を馬鹿にしてやがる、常の場合ならいゝが、こつちは、この通り苦勞してゐる、人間一人の生命に關する場合に、ふざけるもいゝ加減にしろ！
勃然として怒りをなした米友が、

「先生！ 起しろ！」

右の手をかざしたかを見ると、これはまた近頃手厳しい、道庵先生の横つ面をピシリと音を立て、一つひんなくりました、なぐつたのは無論米友で、なぐなれたのはその師であり主であるところの道庵先生なのです。

「あ、痛え！」

それは、多少手加減があつたとはいへ、米友ほどの豪傑が、怒りに任せて打つたのですから手練のほどだけでも 相當以上にこたへたに相違ない。

さすがの道庵先生が、頬べたを抑へながら寢床の上に一丈も高く飛び上つてしまひました。

「痛え！」

「先生、冗談ぢやねえ、病人が出来たんだ、早く見てやつておくんないさ！」

飛び上つてまだ痛みの去らない道庵を米友が横の方から突き飛ばして押ころがしてたうとうお雪ちゃんの寝てゐる寢處へまで押し込んでしまつて、ほつと息をついたのです。

いかに何でも、先生の横つ面をびしやりと食はせるといふやうな事は米友として前例の無い手厳しさであるが、米友としては安宅の辨慶の故智を學んだわけでもあるまいが、非常時を外にする緩漫なる相手には、かうもせざるを得なかつた動機の純眞さには同情を表してやらなければならないでせう。

四十八

道庵先生を文字通りに叩き起してこれを別室へ突き飛ばし突きころばして置いて、宇治

三二三

山田の米友は自分は例の杖槍を拾ひ取るかと見ると、裏口から躍り立つて外の闇に消えてしまひました。

こゝが米友の正直のところであり、道庵の信用の存する處であり、米友としては、斯うして道庵をお雪ちゃんのゐる處へ役げ込んで置きさへすればあとの處はもう一切心置きなしと信じてゐたのでせう、自分が案内をして傍についてゐて、どうのかうのと云ふよりは道庵そのものを一かたまり掴み込んで置きさへすれば、それで病人に對しての萬事は足りてゐる、死ぬべきものでもこの人が生かして呉れる、いや、既に死んで了つた自分をさへこの先生は生かし返らせて呉れてゐるのだ。

そこで、米友は、道庵を突き飛ばして置きさへすれば絶対信任を置き得るが故に、全く後顧の憂ひ無くして外の闇へと身を躍らして飛び出し得たものであります。

外の闇といふのは、御承知の通り、囃の部分に屬するところの膽吹の山麓でありました、けれども、その闇であることは前に遊魂のさまよひ出でた時の光景と同じことでありましたが、黒漆の崑崙夜袖に走るといふことの如く、宇治山田の米友が外へ飛び出すと、外の

闇が早くもこの小男を呑んで行方のほどは全くわからなくなりました。

生憎にも、この際この男に向つては、セント・エルモス・ファイアといふやうなものも飛びつかず、ファイアの方でも浮つかり飛びつかない方が無事だと思つたものでせう、絶えて異象を現はすことはなかつたのですから、この黒漆崑崙が何も目的あつて、何れに向つて飛び出したのだから、一向わかりませんでした。

お雪ちゃんの部屋まで掴み飛ばされた道庵の事は暫く問はず、この闇が漸く消え去つて東方が白み渡つた時分になつても、龍之助も歸らず、米友も立ち戻つて來なかつた事は事實であります。

夜が全く明け放れましたけれど、遂に二人はこの館へは戻つて來ませんでした。

併し、朝の相當の時間になると、意外にもお雪ちゃんが起きて窓の下を流しでしづかに水仕事をしてゐるのを見ました、平常よりは蒼い面をして、全く病み上りの色でしたけれど、それでも立つて流しもとで靜かに水仕事をしてゐる、それだけの元氣があることによつて、あの時の危急はけろりとしてしまつてゐることもわかり、それが米友の介抱の力も

あり、道庵の醫術のほどもありましたでせうけれども、本來が何か突發的の急性のもので、事態の恐ろしかったほど本質の危険なものでなかつたことがわかるとすれば、兎に角一安心と云ふものです。

道庵は——と見れば、一方の枕屏風の中——つまり昨夜、遊魂がそこからぬけ出した後の寢床にもぐり込んで、すやくと寢息を揚げて居りました、事實上これでは逆で、米友がゐない限り、病人を寢かせて置いて、道庵が看護を兼ね、仕儀によつては流し元までも立ち廻らなければならぬ状態が逆で、病人を働かせて、自分がすやくと寢息を揚げるといふことは、あまりの事なのですが、また、取りやうによれば、斯うして病人が兎も角も働けるやうになりお醫者さんがすやくと寢られるやうになつたればこそ、もう占めたものなので、これがまた逆に戻つて、道庵が水瓶を引くり返したり、鐵瓶を蹴飛ばさなければならぬやうになつてはおしまひです。

自在に鍋を架けて何か朝の仕度をしながら、お雪ちゃんはやつれた面に亂れた髪を少しかき上げて、火箸で暫く火いぢりしながら、物を考へ込んで居りました。そこへ、

「お早きございます」

と表から音なうたのは、意外のやうで意外ではない人でした。

「これは不破の關守さん」

「昨晚は失禮をいたしました」

「どうもおかまひ申しませんで」

「友さんは——」

「ちよつと、今、出かけましたのですが、もう戻りさうなものです」

「お雪ちゃん、あなた少しお面の色が悪いやうですな」

「昨晚、ちよつとね」

「どうか致しましたか」

「ちよつと加減が悪かつたものですから」

「それは、いけません、お薬がございますか」

「はい、お薬もございます、幸……」

と云つてお雪ちゃんはお薬の次に、幸お醫者さんも——と云はうとして、急にさし控へて、

「おかげ様でもうすつかり癒りましたから、御安心下さいまし」

「それは何よりでございます」

不破の關守氏はそろ／＼と爐邊へ近寄つて来て、腰をかけ、煙管を掻き出しながら心安げに話をしました。

「昨晩は、それでもまあ無事でよろしうございましたな」

こちらは、あんまり無事でもなかつたのですが、關守氏のいふことをあげつらふのも、と思つてお雪ちゃんは、

「はい、お蔭様で……」

「實は、こゝまで押し寄せて來はしまいかと、拙者はそれを心配したものでございますが、らな、ロク／＼寝ませんでした、それでも幸に春照の高番あたりでちよつとしたボヤがあつただけで無事に済んだのが何よりでございます」

關守氏の無事でよかつた、無事でよかつたといふことがお雪ちゃんにはよく受取れないのです、昨晩長濱方面から歸りがけたといつて立ち寄つた時に關守氏が何か云つたやうだけれど、いろ／＼に氣の散つてゐるお雪ちゃんには、それが思ひ出されないのであると、關守氏は續けて、

「併し、まだ今晚が險着でござんすからな、友造君によくその事を話して置いて、相成るべくは早く戸を締めてさうして燈火も外へ漏れないやうにすることですな」

さまで念を入れての警戒がお雪ちゃんによく呑み込めないでゐたがやう／＼それと感づいたか、

「關守さん、もう、大丈夫でございますよ、友さんの親切で子供を連れて行つてしまつたんですもの、さう、しつこく仕返しになんぞ來はしないとわたしは思ひますわ」

「何のことです、お雪ちゃん」

「關守さん、あなた何のことを仰有つてゐらつしやるのですか」

「何のことぢやありません、昨晩もちよつとお話したぢやありませんか、湖岸一帯のあの

「撥暴動のおそれなんですよ」

三〇

「まあ、そのことでございましたか、わたしはまた、あの鷲の子のことかと思ひました」
「いや、そんなんぢやありません、鳥獸トリケモノの沙汰ぢやないのでござす、人類が食ふか食はぬかの問題でして……」

そこで、お雪ちゃんにも、關守氏が關心を置くことの仔細がよく呑み込めました。

四十九

「まあ、お聞きなさい、お雪ちゃん、斯ういふわけなんです、事の起りとそれから騒動の及ぼす處の影響は……」

と前置きして、關守氏がこんな事を語り聞かせました。

「今度の檢地は江戸の御老中から差廻しの勘定役の出張といふことですから、大がかりなものなんです、京都の町奉行からお達しがあつて、すべての村々に於て此の際如何やうな願ひの筋があらうとも聞き届けること罷りならぬといふお達しがあつて、村々からそのお

請書を出させて置いての勘定役御出張なのです、そこで老中派遣の勘定役が兩代官を從へて出張してまゐりましてな、郡村に亘つて、檢地丈量の尺を入れたのでござるが、もとよりお上のなさることだから人民共に於て否やのあらう筈はないのでござるが、そのお上のなさるといふのが必ずしも一から十まで公平無私とのみは申されませんでな」

關守氏は煙管を爐邊でハタ／＼とはたいて、吸殻すくちを轉がし落してから、吸口をスバ／＼とつけて見て、

「つまる處、わいろなんですわねえ、當節は到る處、それなんだからいけませんなあ、わいろでもつてすつかり手心が變るんですからいけません、一體役人がわいろを取つて公平を失するといふことほど政治上いけないことはありませんね、百姓共は壓制に慣れてゐるから一時は泣き寝入りのやうなもの、いつかそれが溢れると恐ろしいことになります、今度の騒ぎも、そも／＼その江戸御老中派遣の勘定方がわいろによつて檢地に甚だしい手心を試みたそれが勃發のもとなんで、早い話が……」

關守氏が元來話好きなのに、お雪ちゃんといふ子が聞き上手とでも云はうか、相當に理

解がある上に、知識欲も盛んで、あれからホンの僅かの間の交際ではあるけれども、關守氏はお雪ちゃんを話相手とすることが好きなので、暇を見ては話しに来ることを樂のしみにしてゐるやうなあんばいで、お雪ちゃんも亦、この人が話し好きであるのみならず、よく物事の情理を心得てゐることを知つてゐるから、悪くはもてなさないのてつい話もはづんで行くのでした、さうして、その話すところを掻摘んで見ると次のやうなことになるのです。

江戸老中派遣のわいろを取る役人が来て思ふ存分に間竿けんざはを入れるその位だから寛嚴の用心が甚だしく、彦根、尾張、仙台等の雄藩いっせはんの領地は避けて竿を入れず、小藩の領地になるといふと見くびつて、烈しい竿入れをしたものだから領民が恨むことごとく、そこでこれはたまらぬと庄屋連が寄り合つて、竿入れ中止の運動を試みようとしたがそこはわいろ、役人に抜目がなく、豫め一切の訴願まかりならぬといふ受書を取つてある、併し領民たちになつて見ると、死活の瀬戸際だから黙止してはゐられない、その鬱憤うっぷんが積りつもると大雨で水嵩が増して行くやうに、緩漫に似て漸く強大である、何處の村からどう起つたといふこ

とは今わからないけれど、近江の四周の山水が湖水へ向いて集るやうに、湖岸一帯の人民の不平がある地點へ向つて流れ落ち、溢れて来る。

たとへば、野洲郡のすけと甲賀郡こうがの歎願組が合流して水口に廻らうとすると、栗田郡くりたの庄屋が戸田村へ出揃つて来る、勘定役人が甲の川沿から乙の川沿に行かうとすると、丙の郡の農民が結束して集まるもの數千人、殊に甲賀郡西部方面から押出した農民は水口藩みづぐちはん警固の間を外れて權田川原に屯し、同勢見る／＼加はつて一萬以上に達し破竹の勢で東海道を西上し石部の驛に達したが膳所藩ぜんじよはんの警固隊を突破し三上村に殺到、こゝで他の諸郡の勢と合し無慮二萬人に及んで三上藩に押し寄せるといふ勢力になつた。

幕府の勘定方の役人は、その時、三上藩みかみはんにゐたが、藩の役人が怖れて急ぎ避難をなさるやうにと勤めたが剛情な幕府勘定方役人はそれを聞き入れない、遂に群衆は陣屋へ殺到して、勘定方役向を取り圍んで口々に歎願を叫んでゐる、幕府勘定方役人の生命も刻々危急きんじに瀕してゐる。――

といふやうな情狀を、關守氏が自分で集めて來たのと、風聞に聞いたのとを差し加へて

お雪ちゃんに説明して話の興が漸く耐になるところへ、そろり／＼と音がして、その場へぬつと道庵先生が寝ぼけ眼で現はれて來ました。

それを見ると、關守氏も一時は呆氣にとられましたがお雪ちゃんも、少しきまりが悪い思ひをしながら、

「あの關守さん、この先生は、米友さんの御主人でございましてお江戸から上方への御旅中なのですが、昨晚、米友さんがお連れ申しました」

「は、左様でござるか、それは／＼」

「わつしあ、道庵でげす、何分よろしく」

道庵先生が、すっかり済まして、まだ面も洗はないのに爐邊へ納まり込んでしまひました。

こゝで、關守氏と道庵先生に話をさせたら、また一市榮えるだらうと思はれたが、そこはお互にまだ生面のことではあり、さすが話好きの關守氏も、これを機會に御興を上げて立ち歸ることになると、お雪ちゃんが、

「では、關守さん、またおひまを見てゐらつして下さいまし」

とお雪ちゃんは、餘情を残したげで、強ひて關守氏を引きとめようとはしませんでした。

「では、さやうなら」

關守氏は入つて來たトンボ口の方から出て行つたが、暫くして南表廣庭の方へ廻つたと見えて、そこで誰を相手にともなく、こんなことを云ひ出したのがよく聞えました。

「辨信さんにも困つたものでねえ、この騒ぎの中を出かけましたよ、竹生嶋へ御參詣だなんていひましてね、長濱から船に乗るつて云つてましたが、何しろ時機が悪いからもう少し動靜を見定めてからにしちやあどうだねと忠告して見たが聞きませんね、なあーに、わたくしなんぞは不具者の一徳と致しまして上役人様も、お百姓方も、どなた様もお目こぼしを下さいますから御方便なものでございます、竹生嶋の辨財天へはかねての誓願でございまして、數へて見ますると一度月まはりもよろしうございますからこれから出かけてまゐります——と例の調子で、留めるのも聞かずに出て行きましたぜ、成程、あれで琵琶を本業と

してゐますと、辨財天は親神様のやうなものですから、あの坊さんとして行きたいのは當然でせう、弱々しい癖に剛情なものです、怪我がなければいゝと思つて居りますがね」

關守氏が誰に向つてか、こんなことをいふのを庭と障子を隔てゝお雪ちゃんが手に取るやうに聞きました、最初は自分に向つて呼びかけたのかと思ひましたが、さうでもないやうですから、わざと返答を控へてゐるうちにこれだけのことを言ひ捨てゝしまひますと、關守氏はそのまゝすたくと本館の方へ行つてしまつたやうです。

では辨信さん、かねて竹生嶋へ行きたいと云つてゐたが、我慢しきれずに今朝出かけてしまつたと見える、湖水巡りをする時は一緒にしませうと約束をして置きながら、ひとり出しぬいてしまふのはひどい、それは辨信さんはたゞの遊覽と違つて竹生嶋の辨天様へ琵琶の方で特別の心願があるのですから、一緒にはならないかもしれないが、行くなら行くやうにわたくしに一應挨拶をして下さつてもよかりさうなものを、ひとりで行つてしまふのはひどい、とお雪ちゃんは心の中で少し辨信を怨みました。

それだけではない、昨晚出て行つた人が一人も歸つてゐないではないか——宵のうちの

ことはこゝに思ひ出すまい、あの親切な米友さんがゐない、もう歸つて來さうなものだ、と、お雪ちゃんはその心配しながら、

「先生、どうぞお手水をお使ひ下さいませ」

鐵瓶の湯をうつして道庵先生の爲に洗面の用意をしようとする、

「まあ、いゝよ、病人は病人のやうにしてゐなさい、愚老なんぞは、一切萬事人任せでげす」

と云つて、お雪ちゃんがかよわい手で卸さうとした鐵瓶を道庵が自分の手で取扱はうとして、

「あ、ツ、ツ、ツ」

と云ひました、大したことではないのです、鐵瓶の蓋が少し焼け過ぎてゐるのを、藥罐の方は扱ひつけてゐるけれども、鐵瓶の方はあまり扱ひつけてゐなかつたものですから、少々熱い思ひをしたゞけで、また神妙に取り直しそれを流し元へ持つて行つて道庵が手づから洗面にとりかゝりました。

その翌日、長濱の町は水を打つたやうに静かでありました。

その前の日あたりの人民の動搖の低氣壓は消散してしまつたか、さうでなければあのまま凍りついてしまつたやうです、昨晚篝を焚いたには相違ないのですが、今朝になつて見ると、それが滞りなく炭の屑に化してしまつてゐただけのもので、その篝火の下で何等異状のものゝ出沒が照し出された形跡はありませんでした。

少し、今朝調子が變つた點がありといへば、それは、いつも早起の町民が少々眼の醒め方が遅いかとも思はれる位でしたが、その時分ひよつこりと八幡町の町の辻へ姿を現はしたのは辨信法師に相違ありません。

「えゝ少々物を承り度うございますが、りんこの渡場まで参りますには、どちらへ参りましたら宜しうございませうか、これを眞直ぐに参りまして、さしつかへございませうまいか、或ひは右に致した方が順路でございませうか、それとも左——」

斯ういつて、杖を町の辻の眞中に立てましたが、誰も答へるものにはとませません。

それは前云ふ通り、時刻としては、そんなに早過ぎるといふわけではないのですが、町民が今朝に限つて眼のさめる事が遅いのですから自然戸を開くことも遅れて、折から通り合せる人も無ければ、店の中で認めて挨拶をして呉れる人もないといふ状態なのです。

「まだ、どなたもお目ざめになりませぬな、今朝は別して皆様お静かであらうつしやいますな、では、兎も角わたくしはこの通を眞直ぐにまゐつて見ることにいたしませう、さう致しますると、いづれは湖の岸までは出られるやうに思はれてなりません、りんこの渡しと申しますのも、つまり、その湖の岸のいづれかにあるものに相違ございせんから、何はしかれ、湖岸へ向つて進んで見まして、それからのことゝいたしませう」

誰れも挨拶を返すものがなくとも、この小坊主は喋ることにかけては相手を嫌はないのであります、ですから、一向ひるむ氣色もなく、そのまゝ右の辻から杖をうつさうとする

と、

「待て——」

と云つて、一人の足輕が棒をもつて物蔭から立ち現はれました。」

「はい」

「坊主、貴様は何處へ行くのだ」

「はい、わたくしは竹生島へ參詣をいたしたいと心得て出てまゐつたものでございませぬ、最初の出立を申し上げますと、日蓮上人が東夷東條安房國とおつしやいました、その安房國の清澄のお山から出てまゐりまして、その後追々と國々を經めぐつて漸く此の近江の國の伊吹山の麓まで旅を重ねて參りましたものでございませぬが、御覽の通り旅路のかせぎと致しまして、平家琵琶の眞似事を、ホンの少しばかりつとめますもの故に、此の近江の國の竹生島は淺からぬ有縁うゑんの地なのでございませぬ……」

「これ、さうのべつにひとり喋りまくつてはいかん——貴様見るところ目が見えないのだな」

「はい、御覽の通りでございます、まことに前世の宿業が拙うございまして、人間の心の穢が差がれてしまひました、淺ましい身の上でございます、そも、わたくしがこのやう

な運命に立ち至りました最初の……」

「これ、まだ貴様の身性を調べたわけではないのだ——連れはあるのか、無いのか」

「はい、連と申しますのは、一人もございませぬ、一緒に連れて行つて貰ひたいと申したものはございませぬが、思案をいたして見ますと、獨り生れ獨り死に獨り去り獨り來るといふのが本來出家の道でございまして、まして此の通り不具の身ではありませんし、我人共に迷惑のほどを慮りました事故に、わたくしは誰れにも挨拶なしに、こつそりと抜け出して參りました、あの竹生島へ渡りますには大津から十八里、彦根から六里、この長濱からは三里と承りました、この一番近い長濱の地から出立させていただくことも本望の一つなのでございます……そも、私がこの度近江の國の土を踏みまして、琵琶の湖水を竹生島へ渡らうと思ひ立ちました念願と申しますは……」

「いゝから行け！ 行け！」

足輕は遂に匙ではなく棒を投げてしまひました、つべこべとよく喋べる坊主で黙つて聞いてゐれば際限が無かりさうだし、さうかと云つて、咎め立をして拘留處分を食はずには

餘りに痛々しいものがある、それにまた、江州長濱といふ土地は、昔は錚々たる城下の地であつたが、近代は純然たる商工都市になつてゐる、さうして同時に信仰の勢力がなかなか侮り難いものがある、うっかり坊主を侮辱して現世罰の祟りを受けてもつまらないと感じたのかそのことはわからないが、足輕がたうとう棒を投げ出して、辨信の無事通過を許さざるを得なくなりました。

五十一

併し、どこをどうして来たか、そのうちに辨信は湖岸の一部へ出るには出ました。そのたづねてゐたところの、りんこの渡しといふのが、果していづれの處にあつて、その乗合船の出發の時間がいつであるといふことの觀念はないらしいが、とにかく船着だから、水に近い處にあるといふ判断には間違なく、されば取敢ず湖の岸へ出るることによつて

目的地に當らずとも遠からぬ地點に達してゐると信じてはゐるらしい、さうして湖岸をめぐら探しにぐる／＼廻つてゐるうちに、飄箆のくびれのやうな地點をとつて岬と覺しい方

面へずん／＼と進んで行つたのでありますが、さすがの辨信もこゝでは少々勘違ひを演じた見え、岬の突端の方を當にして進んで行くほど物淋しくなつて草深くなつて、さうして木立さへ物々しくなるのでありました、通常山へ向つては奥深く水へ向つては股賑を豫想されるのでありますが、今はそれが裏切られて行くやうな筋道にも、辨信はさのみ失望しなかつたと見えて、その草叢の中を進み進んで行きますうちにある巨大なる切石が置き捨てられある處で足を止めました。

「もし——」

と、そこでまた突然と、物に向つて呼びかけたのですが、無論、誰れもゐないのです、見渡す限り、この荒園のやうになつてゐる木立の間から、湖面が渺として展開されてゐるのを見るには見るが、そのあたりは全く人氣のない荒涼たる海岸の地となつてゐるところで辨信が足をとめて聞耳を立て、後、

「もし——」

と云つたのは、前例によつて見ると、何ぞ相當に人臭いものを勘づいた故にこそせう、

併し、手答へはありませんでした。

「もし——少々物を承りたいのですが」

明眼の人の眼は外れても、辨信の勘の外れた例のないのを例とすることによつて、斯うして辨信から、

「物を承りたい」

と呼びかけられた當面には何か相當のものが存在してゐなければならぬ筈なのです。果して、有りました、有つて見ると、格別珍らしいものではありませんでした。

それは、今も云つた辨信が杖を立て、踏み止まつたところから、ある僅少の距離を隔てて荒草の間に蟠居してゐた處の巨大なる切石の峽はざまにうづくまつて丸くなつて寝てゐたところの一つの動物があつたのですが、それは丁度、辨信の立つてゐるあたりの地點の背面からは見えないのみならず、前へ廻つて見たところで、丈なす荒草と、切石といふよりも、巖と巖との間と云つた方がふさはしいほどの岩角の峽にはさまつて眠つてゐるのですから、わざわざ探さない限り認められよう筈はありません、且又この動物は、此の絶對の避難地

とも安全地帯とも云へる穴あなの中なかで、いとも快き眠を貪つてゐるものですから、寢息とても非常に穩かなもので晝寢の熟睡に落ちてゐるのですが、辨信の第六感に逢つてはかなひま sense せんでした。

「もし——お仕事をおさまたげして相すみませんが、少々物を承りたいのですが」

二度まで繰り返して、それから、とんと一つ杖をつき返して見ました、その杖の音にはじめてこちらの動物が夢を驚かされたのでせう、むつくりと刎ね起きて、

「なに、なに、何だつて、誰か何か云つたのかい」

動物が、むつくりと巖角の間から身を起して、斯う云つて、キョト／＼と眼を見廻したることによつて、單なる動物でないことがわかりました。

巖とはいふけれども、本來、こゝに斯ういふ岩石が構成されてゐるといふ地質の處ではないのですから、何かその昔の相當宏大なる建築の名残りでなければならぬ處の巖と巖との間にはさまつて、快眠を貪つてゐるところだけを見れば、誰にも動物！ むじなとか

狸とか或ひは穴熊とか云つて見たくなるでせうが、斯うしてむつくりと刎ね起きて、その瞬間、齒切れの悪くないタンカを飛ばしたところを見れば、勿論、これも動物の一種には相違ないが、その意外なる存在に少々驚き呆れしめる、一方の小法師はその圖を外さずに、「あの——少々物を承りたいのでございますが、この邊にりんこの渡しといふのがございませうか、わたくしは、その渡しから竹生島へ參詣を致したいと思つて參つたものなのでございますが……」

「なに、何だ、りんこの渡し、その渡しからお前は竹生島へ渡りてえんだつて、待ちな、待ちな」

と云つて、眼をこすつて右の動物がすつくと岩角の間を分けて、荒草の中から立ち現れたところを見ると、なあんのことだ、これぞあんまり知らない面でもない宇治山田の米友でありました。

だが、辨信はまだ米友を知らない、米友もまだ正當には辨信に引き合されてゐないと見てよろしい、そこで、暫くは生面未熟の間の人と人として、荒草を間にして當面に相立つ

たのです。

「おいらも、本當の處は、この土地の人間ぢやあ無えんだから、よく地の理を知らねえんだ、だが、この土地は、江州の長濱といつて湊になつてゐるんだから船つきも、船の出どころも幾らもあるよ、どこがりんこの渡してえんだか、おいらは知らねえが、竹生島といふのは眼と鼻の先きなんだ、頼んで見たら幾らも船は出るだらう」

「さうおつしやる、あなたは、もしや米友さんではございませんか」

「え、え、おいらを米友と知つてるお前は誰だい」

「わたしは辨信でございます」

「辨信？」

「はい、米友さん、あなたのお名前はお銀様からお雪ちゃんからも、絶えず聞いて居りました、わたくしは、やはりあの膽吹山の京北御殿に厄介になつてゐる辨信でございますよ」

「は、あ、さうか、お前があの辨信さんか」

と米友も合點がきました。

三三八

さうして、こゝで心置きなく、荒草をすし／＼と踏みしだいて辨信をまともに見るべく進んで行きましたが、寧ろ、こんな處に斯うして米友が休息をしてゐたといふ現象によつて見ると、今曉あゝして道庵先生をお雪ぢやんの寢室に抛り込んで置いて闇の中へ身を陥没の長濱の地まで一氣に山腹を走り下つたものと見なければなりません。

さうして何をか目ざし、何をか當りをつけようとしたが、その効果のほどはわからないが、兎も角も、この安全地帯まで来て、しばしの快眠を貪り、やがてまた相當の進出を試みようといふ休養時代であつたことがよくわかります、その休養期間を思ひもかけず、辨信といふものが来て驚かしてしまつたといふ徑路もよくわかります。

斯くて、米友と辨信とは近江の湖畔のこの地點で當面相對して、水入らずの會話をしなければならぬやうに引き合はされました。

二人は遂に此の巖蔭の日向のよい地點を選んでそこを會話の道場としましたが、この巨

大なる切石であつて、同時に巖石と巖石の形を成してゐる石質の由來を辨信が勘で云ひ當てました、多分これは大關秀吉が長濱の城主であつた時代の遺物、その秀吉の城郭の一部を爲した名残りの廢墟の一つでありませう、さうでなければ此の邊に斯様な大巖石がある筈はないといふやうな事を辨信がうわ言のやうに云ひました。

五十二

女興行師のお角親方は、一つには膽吹山入をした道庵先生を待ち合わせる間、一つには三井寺參詣と八景遊覽の爲に大津へ先着をして參りました。

さうして、三井寺へも參詣をすませ、法界坊の鏡供養も見て、今日は舟を一ぱい買ひきつて、これから瀬田、石山方面の名所めぐりをしようといふ出鼻であります。

お角さんのことだから、日頃あんまりケチ／＼するのは嫌ひなんだが、殊に旅へ出て斯ういふ素晴らしい名所に出くわした上に、いよく京大阪も目と鼻の間といふことになつて見ると、心が何となくはづんで、いでたちがげ／＼しくなるのは、勢ひ已むを得ないこ

とであります。

三四〇

見れば、お角さんの買ひ切つた一ぱいの舟には幔幕が張り立てられ、毛氈が布かれて、そこへソロ／＼と藝子、舞子、たいこ末社やうなものが繰り込んで来るのです。

さうして、舟宿がペコ／＼と頭を下げる中を、お伴の若い者二人を具して、お角さんが大襟おほほりに乗り込んで來ました。

さうすると、げい子や舞子、たいこ末社連がよく聞きとれない言葉で、ベチャクチャとお追従を云つて取巻いて、下へも置かずお角さんを舟の正座に安置する。

左右へ、若い衆や庄公が着いて、舞子やたいこ末社が居流れる。

そして又舟の中へ酒よ肴よ會席よといったものが持ち運ばれて出舟までの準備さへ相當の手間が取れるのです。

お角さんの氣象がおのづからはづんで、京大阪への手前、多少共江戸ツ子は江戸ツ子らしく振舞つて見せなければ後の外聞にもなるといつたやうな、お角さん相當の負けない氣で、この際、自分が江戸ツ子を代表してゝもゐるやうな氣位になるのも是非がないでせう、

そこでこの八景めぐりが自然にお大盡風を吹かせるやうな景氣になつて、そこは、相當の要處々々へ金をきれいに使ふことは心得てゐる、舞子やたいこ末社まで取り巻きに連れ込んだのは、これは何か偶然の達引かさうでければ、轉んでも只は起きない例の筆法でこの一座のげい子、舞子、たいこ末社連のうち、將來利用のきゝさうな玉があると見込んでゐることかも知れません。

兎に角斯うしてお角さんの八景巡りは仰山ないでたちでありました、道を通る人も、乗る舟を見かけて集るほどの人も皆んなこの華々しい景氣に打たれて眼を奪はれないものは無いのです、さうして何處のお大盡の物見遊散かと、その主に眼をつけると案外にも關東風の女親分といったやうな傳法が、頻りに舟の中で指圖をしたり、叱り飛ばしたり、おだてたりしてゐるものですから、舞子、藝子、たいこ末社の華々しさよりはこの女親分の威勢のほどに氣を取られ目を奪はれないものはありません。

斯うしてお角さんの八景遊散舟が出立の用意に忙がしがり、岸に立つ者、もやつてゐる舟の注視の的になつて、その風流豪奢の程を羨んだり、羨ましがられたりしてゐる處へ群

衆を押し分けてのそり／＼とお角さんの舟へ近づいた異形のものが一つありました。

頭はがつさうで、ぼう／＼としてゐる、身にはやれ衣をまとひ、背中に紙轡を一本挿し、小さな形の釣鐘を一つ左手に持つて、撞木でそれを叩きながらお角さんの舟を眼がけて何か頻りに唸り出しました。

その姿を見ると芝居する法界坊の姿そのまゝですからあほだら經でも唸り出したのかと見ればさうでもなく、謠の調子。

「秋も半ばの遊散舟、八景巡りもうらやまし、これはこのあたりに住む法界坊といふやくざ者にて候、さよなみや滋賀の浦はの花もみちも月も雪も隅々まで心得え候、あはれ一杯の般若湯と五十文がほどの鳥目をめぐみ賜はり候はゞ名所名蹟、故事因縁の來歴まで委しく案内を致さうづるにて候、あはれ、一杯の般若湯と五十文の鳥目をたびて給へ候へ、なあむ十方到來の旦那様方……」

こんなことを謠の文句で呼びかけるものだからどうしても舟の連中の耳障りにならないわけには行きません、併し、誰も進んで出ないとも出るとも云はないで舟の装ひに忙がしが

つてゐるものですから右のまがひものゝ法界坊はしつ／＼こく、

「あらおもしろの八景や、まづ三井寺の鐘の聲、石山寺の秋の月、瀬田唐崎の夕景色、さては花よりおぼろなる唐崎濱の松をはじめ、凡そ八景の名所々々の隅々まで案内はもとより故事來歴までも一切心得て候、あはれ福徳圓滿諸願成就の旦那衆、一杯の般若湯と五十文の鳥目をたびて給ひ候へ、御案内を致さうづるにて候」

それを聞いてたまり兼ねた若い者の庄公が、

「何だ、何だい、何をおめえさんそこでブツ／＼云つてるんだい」

「あはれ一杯の般若湯と五十文が鳥目をたびて給ひ候へ、八景の名所々々洩なく御案内を致さうづるにて候」

「何か七むづかしいことを云つてゐるが、何かい酒を一杯飲ませてくれて五十貫へば八景の名所案内をしてくれるとでもいふのかい」

「さん候、何れもの旦那衆にさ様に勸進を申し上げて御用をつとめまらせ候、今法界坊とはやつがれのこと御座有り候」

「うるせえな、親方——」

三四四

と、お角の方を庄公が向き直つて、

「親方、お聞きなされる通り變手古な奴がやつて來ました、あの法界坊の出來損ねえみたいな奴が、一杯お酒を御馳走になつて五十貫へば名所案内をしてくれるつて云ひますが、追拂つちまひませうか」

お角がそれを聞いて、

「まあ、いゝから呼んでおやりよ、わたしはあんまり故事來歴なんぞ知らないから聞かして貰へば學問になるよ、こつちへ呼んでおあげ」

と云ひましたから、庄公は又今法界坊の方へ向き直つて、

「おい、法界坊さん、ぢやあ案内をおたのみ申すことになるんださうだから、こつちへお入り」

「これは、忝けのう存するにて候」

といつてのこゝくと今法界坊は舟の中へ入つて來て一隅にちよこなんと座を構へました。

さうしてゐるうちに、舟は漸く纜を解いて乗り出す、天氣も好いし景氣もいゝものですか
らお角さんもいゝ氣になつて今法界坊を手許に差し招き、

「和尚さん、さあ、一つあがり、わたしや、こちらの方へは今日はじめて、一向何も知りませんから、一杯やりながいろ／＼この土地の世間話をして下さいな、名所案内ばかりぢやありません、何でもいゝからこの土地にあり來りの話をして聞かせて下さいな、さあ、遠慮なくおやり、舞子さん、あの和尚さんにお酌をしてあげて頂だい

といつて今法界坊にお角はまづ酒と肴を振舞ふと法界坊、いたく恐悦して盃を押し戴き一口しめして、肴をつまみ、

「あゝら珍らしや酒は伊丹の上酒、肴は鮓のあま煮、こなたなるはぎぎの味噌汁、こなたなるは瀬田のしじみ汁、まつた、これなるは源五郎鮓のこつきなます、あれなるはひがいのろ、この葉燒の二杯酢、これなるは小香魚のせごし、香魚の飴だき、いさゞの豆煮と見たはひが眼か、かく取り揃へし山海の珍味、百味の飲食、これをたら腹鼻の下くうでんの建立に納め奉ればやがて濛いところで政所のお茶を一服いたゞき、お茶うけには甘いところで

三四五

扇針峠のあん餅、多賀の糸切餅、草津の姥ヶ餅、これ等をばお茶うけとして呼ばれ候上は右と左の分け使ひ、もし食べ過ぎて腹痛みなど仕らば鳥井本の神教丸……」

くだらないことをのべつに喋り立てながら、酒を飲み肴を敷へたてる、お角さんもそれを興あることに思ひ、それから、

「まあ、舞子さん達、暢氣に一つ踊つて下さい」

藝子、舞子やがて三味線、太鼓にとりかゝると今法界坊が、

「さらば愚僧が一差舞うて御覽に供へようづるにて候」

一々諸曲まがひのせりふで、がつかう頭に鉢巻をすると、今にも浮かれて踊り足を踏み出さうとする氣構へ、此奴も相當に茶人だと一座も興に入りました。

さうして、舟は湖面を迂り出して瀬田石山の方へと進み行くのであります。

五十三

斯うしてお角の遊散舟が、さんざめかして湖上遙かに乗り出した時分に、遠しくその舟

齧へ押しかけた一團の者がありました。

その連中を見ると、野侍のまじひのやうなものもあり、安直な長脇差もあれば三下のぶしよく、世もあり——相撲上りもあり、三びんもありいづれも血眼になつて此處へなだれ込んでさうして、

「どうした、お角といふ阿魔は何處へうせた！」

「や、一足遅かつた！ あれだ、あの遊散舟で乗り出したあれがお角に運えねえ！」

「もう一足早かりせば」

「あんたはん、どないに致しやしよう、相手はお尻おしに帆かけて逃げやんした、どないに致しやんせう、ちやあ」

彼等は取敢へず、岸に立つて遙かに乗り出して行くお角の遊散舟を見渡しながら、土佐の卜傳に置きざりを食つた劍術高慢のさむらひのやうに、地團歌を踏んで齒噛みをする事の體が尋常ではありません。

しかし、どうやら見たやうな面觸れでもある。」

あ、なるほど、

古川の英次

下駄っかけの時次郎

下つ澤の勘公

雪の下の桑公

里幸のトン勝

さつさもさの房公

相撲取、松の風

よたとん(四谷つとんびの略稱)

安直兄い

木口勘兵衛尉源丁馬

どうしてこの連中が今こゝへ、こんなにまでして血眼になつて駆けつけたか其の仔細を聞いて見ると、

この連中は、恨み重なる垢道庵を、伊吹山へ追込んでこの度こそは有無の勝負を決せんと春照高番まで取りつめて見たが、味方に多少手創を負うたものがありとはいへ、もう斯うなつて見ればこつちのもの——伊吹へ追ひ込んで、遠巻きにぢり／＼と改め立てれば道庵も早や袋の風——石田小西の運命明日に窮つたりと、一同心奢りした爲に、その夜春照高番の宿で前祝ひのバクチをやつたのが運の盡きでありました。

そこへ、不意にお手入れがあつて、右の面々が一網打盡に引き上げられ、嚴重なお取調べを受けた上に、人相書まで取られたり、爪印を強ひられたり、お陣屋へお留置を食つた上に、漸くの事で釋放されたといふ次第で、これが爲に道庵征伐の戦略も一時めちやめちやになつてしまひました。

併しこの不意のお手入れには——どうも指した奴がある、密告をした奴がある、味方に裏切をした奴かさうでなければ、道庵方の伏勢の爲に乗ぜられたのではないかといふ疑心が増長して見ると、

「さうだ、道庵の相棒にお角といふ食へない奴がある、あいつが大津の方へ向けて先發し

てゐた！それを忘れてゐたのが我等の抜かり——道庵の尻抜けは怖るゝに足らず、お角の腕は凄い、こりやてつきりお角が指したのだ、お角の方寸で我々をその筋へ密告したのに遠えあるめえ——さうだ、道庵は袋の鼠、お角こそ大伴の黒主、あいつが萬事糸を曳いてゐる」

そこで、この一まきは、釋放されるや否や血眼で大津方面へ飛んで返り、お角の根據をついたが、そのお角は一足先きに遊散舟である通り、湖面遙かに浮んでしまつた、そこでこちらは岸に立つて足ずり——といふ段取りであつたことがあとでわかりました。

併し、この連中一度は足ずりをして残念だつたけれども、やがて談合が調ふと、二はいの船を買ひ切つて船装ひをすると共に、これに分乗して、遠しく湖中へ向けて乗り出したのは果してお角の船を追ひかけるつもりか、或はなほ身邊の危険を慮つて避難するつもりか、その舉動だけを以てしては眞意のほどはわかりませんでした。

五十四

贈吹の上平館の出丸では、道庵先生とお雪ちゃんとか忽ち打ちとけてしまひました。道庵はお雪ちゃんを前にして爐邊に坐り込むと忽ち左の手を口のあたりへ持つて行つて妙な手つきをして、取敢へず一杯やりたいのだが代物は無いかといふ意志表示をしました。

自分の身體から、この方の氣が切れると、陸へ上つてお皿の水をこぼした河童同様になつて自滅する外はないといふ説明をも付け加へると、お雪ちゃんが心得て、本館の方へ行つて不破の關守氏から一樽を頼ちもらつて來て、道庵に授けたものですから、そのよろこびと云つては容易のものではありません。

直様それを爛にして貰つてちびり／＼試むると、その酒の豊醇なこと、こんな處へ來てこないゝ酒を惠まれようとは全く豫想外のことでしたから、道庵の魂が頂天に飛びました。

それから、お雪ちゃんといふ子の此好意が馬鹿に身にしみて嬉しくなると共に、話をすると、頭がよくつて理解があり、それに知識慾もあつて、相當の受こたへが出来る、それ

に人のもてなしに愛想があつて、親切を極めるものですから、道庵が重ねて嬉しくなつてこの娘さんの爲には、また自分の好意を傾けて、相手になつてやらなければならぬと考へつゝ、頻りに盃と會話とを進めてゐます。

お雪ちゃんの方も亦、この先生が飄逸で、ざつかけで、直で、氣が置けない人柄である上にも、お醫者の方にかけては江戸でも鳴らしてゐる大家であるといふやうな信頼もあるし、當然その脱線も脱線とは受けとれず、その道の當代有数の大家が、自分のやうなものにも調子を合せて相手になつて呉れることだと有り難く思つて、二人は爐邊で、それからそれと話のはづみしました。

そのうちに、どうした話の風向か、道庵の話がお雪ちゃんを前にして性の問題に觸れ出して來ました。

「お雪ちゃん、お前さんも將來はその責任があるのだから、よく聞いて置きなさいよ、わしはエロで話すわけぢやないんだ、お前さんの親切心に酬ゆる爲に、女にとつてこれより上の大事はない、つまり、男で云へば、戰場に臨むと同様なのが、それお産の事だあね、

こればかりは男には出來ねえ、わしや一體どうも身品負をするわけではないが、女の方が男に比べて脳味噌が少し足りねえと思ふね、そりや女だつて多數のうちには男に勝る豪傑——女の豪傑といふも變なものだが、男のやくざ野郎よりは數十段優れた女もあるにはある、男だつて女の腐つたよりも悪い奴がウンとゐるにはゐるが、平均して見てだね、女の方が少し脳味噌が劣る——と云つちや怒られるかね、だから女といふ奴は、男にたよらなければ何一つ出來ない、女のするほどのことは男が皆んなするが、男のするほどの事を女がやりきれるといふわけには行かぬえ、たゞ一つ女に出來て男にどうしても出來ねえことが、しやつちよこ立をしても男がかなはねえことがたつた一つだけある、それは何かと云へばお産をすることだ、こればかりは女の專賣で、男がたとひ逆立をしても出來ねえ、尤も孝經には、父ヤ我ヲ産ミ、母ヤ我ヲ育ツ、とあるから孔子の時分には男が子を産んだのかも知れぬえが、今日、男が子を産んだといふ例は無い、だから子を産むことだけは女の專賣で、この點では男が絶對的に女の前に頭が上がるねえんだが、女さん、増長していゝ氣になつちやいけませんよ、その子を産むといふたつた一つの女の絶對的專賣でさへ男の助

太刀が無けりや出来ねえんだから……」

三五四

「ホ、ホ、ホ、ホ」

と、お雪ちやんが笑ひこけるのを道庵はいよく済まし込んで、

「まあ、それは、どつちでもいゝが、お産だけは今云ふ通り男子の戦陣に臨むのと同様に女子生涯の一大事なんだ、お雪ちやん、お前なんぞは、まだその戦陣に臨んだことはあるめえが——嫁入り前にさういふことは無えのが當り前なんだが、今時の小娘と小袋とは油断がならねえから、或ひはお雪ちやんに於ても、もう或ひは時機に於て、すでに處女を離れてゐるかどうか、その事はわからねえんだが……」

「先生、忌でございます、そんなことをおつしやつては」

「は、は、は、どうも淑女の前でさういふことを云ふのは、本来ならば禮儀に欠けてゐるんだが、こつちは醫者ですから、職業的科學的に云ふんだから、遠慮なくお聞きなさいよ、處女が母となる將來の爲を思つて云つて聞かせてあげるんだから、はにかまずに聞いてお置きなさいよ——」

道庵は、冷静に釋明をして置いて、それからまた盃を擧げ、

「お産を安くしようとするには、まづ免も角身體を冷えないやうにすることだね、身體の冷える冷えないにも、それ〴〵體質があり據るところもあるのだが、人間の身體はどうしても冷えてはいけねえ、清盛様見たいに火水の病も困るが、人間が冷えてつめたくなるとやがてお陀佛になる、そこで身體の冷を救つて、よき子を産む方法がある、膝のうしろの處へ三つお灸を据ゑるんだね——その灸點の場所は、ちよつと秘傳なんだ、お望みなら据ゑてあげませう、幸ひこゝは伊吹山で、艾もぐさに事は欠かない、お望みならそれを一つお雪ちやんあなたに此の場で据ゑて進ませませう——利きませう、道庵が師匠からの直傳の秘法なんですから、効き目はきめんでげす、現にこれまでどうしても子供を欲しがつて與へられなかつた母體に、道庵が秘法を授けてから、ひよいくと三人も五人も産み出しました、女ほど貴きものは世にもなし、釋迦も達磨もひよいくと産むと云ひましてな」

「ホ、ホ、ホ、ホ」

お雪ちやんが、また笑ふと道庵は一層眞顔になつて、

三五五

「その灸點は、もと水戸から出たんだ、水戸の光圀公が發明だなんていふが、そのことはどうか、免に角、ときめん利くよ、現金効能が顯はれる、そいつを一つ今日道庵がお雪ちゃんのを爲に施して進ませませう、さうして釋迦でも孔子でもどしどし産み並べて貰ひてえ」
「いけません、さういふことをおつしやるのは、處女の神聖を侮辱するものでございますわ」

「違えねえ、こいつは一本參つた」

道庵は仰山に右の掌で額を叩いてから、

「將來の爲に云つて聞かせてあげることが、現在に混線しちゃつたんだ、これといふも皆んな爲を思つて云ふことだから、悪くならず聞いてお呉んなさいよ、エロで云ふ譯ぢやねえんだが……」

と、道庵は頻りに言ひ譯をしてから、

「それから、良い子を上手に産まうとするには、右の灸點を受けてから、身體の持ち扱ひだね、身體をゆつたりとして置くことだね、よく坊さんが、それ禪といふのをするだらう、

あれだね、あの形で正しくゆるやかに——といつても結伽といつて、足をあんなに組むには及ばねえ、さうしてるんだね……」

「先生、わたくしは、子供を産むといふことに就て、日頃一つ考へさせられてゐる事があるのですけれど、聽いて下さいますか」

お雪ちゃん何故かこんどは自分から積極的に突込んで、道庵先生に向つて、日頃の疑問を晴らさうと試むる態度に出たものですから道庵も乘氣になつて、

「うむ、何でも質問してごらん、聞くは末代の恥、聞かぬは一代の恥といふこともある、何でも先輩に向つて遠慮なく物を質問して見るようでないと學問は進歩しねえ」

そこで、眞面目に質問をしかけながら、お雪ちゃんが少し可笑しくなりました、といふのは、今道庵が、聞くは末代の恥、聞かぬは一時の恥と云つたのは、たしかに比較が顛倒してゐる、正しくは聞くは一時の恥、聞かぬは末代の恥——と云はねばならない處を、顛倒してしまつてゐるのだから、折角の格言俚諺が全然意味を逆轉せしめてしまつてゐる、しかも、道庵は下流文士がわざとトンチンカンを云つて揶揄するのと違つて自分がそれに氣が

附かないで、頭は正當の意味で口だけが逆轉してゐるのだから罪はない——まだ、初對面早々のことではあり、殊に相手が自分で氣が附かないで眞面目腐つてゐるものですから、吹き出してしまふのも失禮の至りと、お雪ちゃんはやつと我慢をして我に歸り、

「世間で、子供が生まれますと、たゞ目出度い／＼とお祝ひをいたしますけれども、本當にそれが母となる人の爲に、また子供として生れた者の爲に、目出度いことなんでせうか、親は子を産む爲に疲れ子は産み落されて、世の中に翻弄されながら生きて行かなければならない、さういふ場合に産むといふことも、産れるといふことも、そんなに目出度いことなんでせうか、それから人が澤山に子を産んでこの世に人間が殖えて行くことが、果して世間の爲にも人間の爲にも幸福なことなんでせうか、世間には産まない方が慈悲であつたり、産まれない方が幸であつたりする人はないでせうか、人間といふものは、どうしても結婚して子を産まなければ、ならない筈のものなんでせうか」

「そこだ！」
と道庵が、また何かに感奮して、盃を下に置くと共に、掌で丁と額を叩きました。

五十五

「そこだ！」

と道庵先生が、何かに昂奮して盃を下に置くと共に掌で丁と額を叩いたが、やがて、仔細らしく物おだやかにお雪ちゃんに向つて語り出しましたのは

「わしも御承知の通り、醫者ですから、人助けが商賣見たようなわけなんでせう、人の見放した難病を癒したり、死んだ者までも生き返らせたりするのが商賣のようなものだが、どうかすると、つく／＼考へることがあるね、こんな野郎や、こんな阿魔ッ子を生かして置いたつて仕方がねえぢやねえか、こんな奴は一思ひに眠らしちまつた方が功德ぢやねえかと、さう思うことが無きにしもあらずなんでせう、正直のところ……」

さうすると、お雪ちゃんが

「先生、お醫者さんが、そんな情けない心になつちや困るぢやありませんか、ですけれども先生、口と心とは別なんでせう」

「なあに、口と心とは別ぢやねえんだが、心と手とが別になるんだね——心のうちぢやあ正直のところ、こんな奴は眠らしちまつた方が、御當人も助かるし、世の中にも一匹の穀つぶしが存在しなくなるといふ効能になるんだが、どうも、その場に至つて見ると手が承知しなへんでね、この手が……」

道庵は、その變にひねくれた長つばせい手をつき出してお雪ちゃんに見せました。

「この手が、どうも、ついでどうも、未練たつぷりでね、殺さうと思つちや、つい生かしちまうんでね、今日まで、随分餘計な殺生ぢやねえ、餘計な人を生かしてしまつたねロクでも無え奴は殺しちまへば、お前、今も云う通り、それだけ此の世の穀つぶしが減るわけなんだね、まあ、一人の野郎が、假りに一日に五合つつの米を食うとしてからが、月に一斗五升、年にならずと一石八斗、まあざつと四俵半、數が悪いから一人五俵として積つて見なせえ、千人殺せば年に五千俵の米が浮く五千俵の米がお前價に踏んでいくらになると思ふ、近年のやうに米價の變動が烈しくつちあ、勘定をしても間に合はねえが、かりに一俵一兩としても五千兩二兩とすれば一萬兩といふ勘定になるそれをお前こちとらのやうな貧

乏人となると小買だからグット割が高くつくんだぜ、殊にこれから拙者共が出向いて行かうといふ京阪地方なんぞと來ては、物價が目玉の飛び出すほど高くなつてゐるといふ知らせを聞いてゐるから、拙者も實は青くなつてゐる處なんだよ、何でも近ごろは京阪での白米の一升買ひが一貫二十四文といふ事だから、貧乏人は大抵こたへらあな、それに準じてお前、人間は米ばかり食つて生きてゐられるといふわけのものぢやあねえ、お副食物も食はなけりやならず——この方も一杯やらなけりやあならず」

と云つて、道庵が膝元に置いた盃を取り上げようとしたが、手元が狂つて、盃が轉がり出してしまつて、ちよつと當りがつかなくなつたものですから、取り敢へず、手眞似で一ぱいやるしぐさをして見せたのが、眞に迫りました。

「それからお湯に入らなけりやあならず、年に二度や三度はお仕着せもやらなけりやならず、それからまた時たまは、芝居、活動の一べんも見せてやらざあならず（註、こゝに道庵が活動といつたのは、例の脱線であらうと思はれる、その當時はまだ世界の何れにも活動寫眞といふものゝ發明は無かつたのである）ちよつと髪を結うにしても八拾八文取られ

るといふ事だし、湯饅が廿文の糠代が十二文と聞いちや、これから京大阪へ乗込もうとい

三六二

ふ道庵も大抵心膺が寒くなるわな、食ひ雑用をさし引いて人間一匹を生かして置く費えといふものは生やさしいものぢやねへんだ、よく世間の奴等あ食へねえ〜といつて、費乏をするといから十まで米のせいにして高いの安いのと文句を云うが、米の野郎こそいゝ面の皮さ、何も米ばかりが食ひ物ぢやねえんだ、馬鹿にするな！

こゝで、また道庵の脱線ぶりが米友かぶれがして来ました。

「ホ、ホ、ホホ」

とお雪ちやんがまた笑つて、それに次ぎ足して云ひますには

「それは先生、費えの方ばかり考へますと、さうかも知れませんが、その人が皆んな遊んで食べてゐるわけぢやありません、それ〜稼ぎをして、食べて行くんですから、さう情んぢや可哀相ですね」

「處が、なか〜稼ぎをして食つて行くなんていふ筋のいゝのばかりは無えんでね、食つちやあ遊んでゐるのはまだいゝがね、どうかして人の稼ぎたぬを食ひつぷして、自分は樂

をして生きて行きてへといふ奴がうんとゐるんだから、そんなのは、いゝ加減に眠らしちまつた方がいゝんだが、さて、今いふ通り實際となると、なか〜、この手が云ふ事を聞かねへんでな、ついで、無慈悲な人生かしをしまうんだ、人殺しも感心しねへが、人生かしといふ商賣も、これでなか〜辛いよ」

「ですけれど、先生、さう一概に悪い人ばかりある譯ではござんすまい、かういふ人を助けて置けば、國の爲にもなり人の爲にもなる、かういふ方は是非助けて置かなければならないと、お考へになる事もあるでございませう」

「無えね〜」

道庵先生が言下に首を横に振つてしまつたものですから、お雪ちやんも、あんまり膠のないのに少々狼狽氣味でした。そこを道庵が一杯引かけながら

「こいつは生かして置いてやりてへ、こいつは生かして置かなけりやならねへんぞと惚れこんだ奴は、今までに一人もお目にかゝらなかつたのさ、生かして見て、まあ、どうやら我慢が出来るといふ奴は一人や半分はあつたね〜今いふ、お前あの米友公なんぞも、そ

の中の一人に數へていゝんだが、おりやまだ、はなから、此奴を生かして置いて、可愛がつてやらうなんていふ奴には一人も出くわさねへのさ、脈を見たり、薬を盛つたりしてやる時に、腹ん中ぢや、斯う思つてんだね、手前たちや、道庵ほどの者に斯うして脈を取らせたり、安くねへ薬を調合させたり、お手敷をかけて、さうして生きてゐてはなけりやならねへ程の代物ぢやねえんだが、道庵もそれ、商賣となつて見れば、斯うしてやらなけりや食つて行けねえ、今いふ通り食つて行くだけぢや生き甲斐がねえ、食つての上にしき甲斐をもあらせようとするにはそれ一杯も飲まなくつちやあやりきれたものでねへ、そこで、商賣上やむことを得ずして、お前達を助けようてんだ、あんまり大面おほづらをするなよ、と内心、斯う思つて脈を取つたり、薬を盛つたりしてゐるんですよ、正直の處」

「では先生、禪學のお方がよくおつしやる、佛心鬼手なんておつしやいますけれど、先生のは、それと違つて鬼心佛手なんですわね」

「違えねえ！」

と道庵がまた、額を丁と打ちました。

五十六

「違えねえ、愚老なんぞは、その鬼心佛手といふ奴やつで、心にも無え人生かしをして來てるんだが、日蓮上人も云つてらあな、身は人身に似て實は畜身なり——」

御道文集の何處から、そんな文句を引ばり出したのか知れないが、此處で、道庵先生が日蓮上人を引き合ひに出して來まして

「だがな、人生かしばつかりして來てゐるといふわけぢや無えんだ、随分、人殺しもやつてらあな——凡そ此の道庵の手にかゝつて今日までに命を取られた奴が……」

こゝで道庵十八番の啖呵を切り出しました、知つてゐる者は又かと思つてせうが、それを知らないお雪ぢやんは、初耳のつもりで、ついで其のたんかたんかを聞かされてしまはなればなりません。

「凡そ此の道庵の手にかゝつては、先づ助かりつこは無え、今日までに、ざつと積つても道庵の手にかゝつて命を落した奴が二千人は動かねえ處だ、當時、この物騒な時代に、人

か斬ることにかけては武藏の國に近藤勇、薩州に中村半次郎——肥後の熊本に川上彦齋、土佐の高知に岡田以藏——こゝらあたりは名だゝる腕つこきだが、道庵に向つちやあ甘いものさ——凡そ、道庵の匙にかゝつて助かる奴は一人も無え、たまに助かる奴なんざあ、まぐれ當りなんだよ」

「ホ、ホ、ホ、ホ」

お雪ちゃんだけに興を催して、道庵先生の爲に笑つてやりました。

右のやうな自慢は、道庵としては、もう犬も食はない自慢なんですが、お雪ちゃんにとつては新らしいのです、そこで、お雪ちゃんの心持を喜ばせたと見ると忽ち、道庵が附けのぼせがしてしまひました、こゝで、また一つ受けさせてやらうといふ氣になつたのがいけません——さうして物々しく、

「ね、お雪ちゃん、本當でせう、道庵の云う處は欺かざるものがあるでせう、でね、斯ういふ話もあるんだから一つ聞いて置いたゞきてえ、自慢ぢやあ無えが、道庵そのものゝ木地を見ていたゞく爲には恥を話さなけりやあ、わからねえ——道庵のお得意先きに、

丁度、まあ、年かつころも、お雪ちゃん、あなた位の、さうして、あなたと同じやうな愛想のある別嬪さんなんだがね……」

「わたし別嬪さんなんかではありやしませんわ」

「どうして〜、なか〜隅には置けねえね、ところが、そのお雪ちゃん同様の、道庵お得意先きの別嬪さんが、ふと病にかゝつて、是非共道庵先生に診ていたゞきてえ——さう云はれると此方も男の意地で忌とは云へねえ、相手が別嬪だからつて、後へ引くやうな事ぢや、年甲斐も無え——」

と云つて、一力み道庵が力みますと、お雪ちゃんが、また

「ホ、ホ、ホ、ホ」

と笑ひました、相手が別嬪だから、後へ引くようでは年甲斐も無い——といふのは、やつぱり理窟に合はないところがあるのです、それをお雪ちゃんが少し笑つたのでせう、さういふ風にお雪ちゃんの調子がいゝものですから、道庵もいよく附け上つて

「そこで、一通りそのお嬢さんの脈を診て上げて歸りに、先生一杯なんて、餘計な事をそ

の家の両親共がすゝめるもんだから、ついでに氣持になつちまつて、それから牛込の改代町まで來ると、出逢頭に、子供を一人蹴飛ばしちまつたんだね、ところが、その子供の親父が怒ることく、むきになつて怒るから、こつちも相手が悪いと思つて、平あやまりにあやまつたが、先方がどうしてもきかねえ、わしも困つてゐると、いゝあんばいに仲裁が出ました、その仲裁人が、子供の親父をなだめて云う事には、お父さん足で蹴られた位は辛抱しな、此の人の手にかゝつて見たがよい、生きた者は一人もない——だつてさ、そこで、おやぢも、おぞ毛をふるつて逃げて行つた姿が可笑しかつたよ」

「ホ、ホ、ホ、ホ」

お雪ちゃんがまた笑ひこけました。併し、これもお雪ちゃんとしては、笑ひこけるほどの新らし味があつたかも知れないが、實は古いものなので、安永版の初登りあたりにあるのを、道庵が、單にお雪ちゃんを一時喜ばしたいが爲に焼き直した形跡があり／＼です。本來斯ういふ、つまらない技巧は道庵先生の爲に取らない處なんだが、お雪ちゃんの御機嫌に供へるために、ちよつと取り寄せて見たに過ぎないでせう。

素直なお雪ちゃんは、さういふ焼直しや、お座なりを當がはれても、道庵の爲に快く笑つてやりましたが、

「先生、あなたは御自分の棚卸ろしばかりしてゐらつしやるけれども、本當の價うちは米友さんが保證してゐるから間違ひつこはありません、それに、わたしが今斯うして、こんなに元氣にお話を伺つてゐられるのも、先生のお力ですから、これが活きた證據ぢやありませんか、わたしは、先生の御手にかゝつて殺されやしません、現在こんなに元氣に生き返らせていただきました、ですから、何をおつしやつても、先生を御信用申上げずには居られません——そこで先生、わたくしは冗談はさて置いて、眞劍に、先生にお説を伺つて見たいと思ふのでございます、それはつまり、あの最初に戻りまして、世間では、子供が生れますと、たゞ目出たい／＼とお祝ひをいたしますけれども、本當にそれが母となる人の爲に、また子として生れた當人の爲に、目出たいことなんてございませうかなほ押しつめて申しますと……」

「生まれない方が幸福であつたり、産まないが却つてお慈悲ぢやないかとさへ、わたしは思はれてならない事があるのですが……」

「成程」

「産んで苦勞をさせる位なら、苦勞をさせないうちに——いゝえ、この世に産み落さない事にしたのが、結局一番幸福ぢやないかと思はれてならない事もあるのでございます」

「成程、そりやあ——そりや話が元へ戻るが、元へ戻るほど根が太くなる！」

と道庵が云ひました、元へ戻るほど根が太くなるといふ言葉だけは論理に合つてゐるのですが、道庵が、何の爲に突然、右様な論理を持ち出したのか、その事ははつきりしませぬ、たゞ、單純に樹木にしてからが、根元へ来るほど太くなるといふ現前の事實が平明に突發して見たのだから、或ひはお雪ちゃんの提出した根本問題が漸く重大なるものに觸れて行くことを怖れたのだから、その邊は相變らずハッキリしないものであるが、多少の狼狽氣

味は隠せないものがあるやうです、實は前々お雪ちゃんから左様な性と生との根本問題をかつき出されて一圖に共鳴感奮して見たものゝ、この問題をあんまり深く追究されると、自分の焼刃が剥げることの怖れから、冗談に逃げてゐたのを、また引き戻されて押し据えられる苦しさ、道庵が唸き出したようにも聞きなされたが、道庵先生ほどのものが、たかが小娘のお雪ちゃんに合つて、その鋭鋒を避けなければならんといふやうな、卑怯未練な振舞はあるべき筈はないのです——果して、陣形を立て直して道庵先生が鹿爪らしく構え出してお雪ちゃんに答へました。

「そりや、人間、生れて来た方がいゝか、生れねへ方が勝ちか、その事はわからねへね、その事は、わからねへけれど、生れ出て、斯うしてピン／＼してゐる以上、どうも仕方が無えぢやねえか——こゝでまあ、假りにわしが、お雪ちゃんを憎いと云つた處で、殺すわけにや行かず、可愛ゆいと謂うたところで、茹でゝ食うわけにや行かず」

また、おかしくなりました、可愛ゆいからと云つて茹でて食はねばならぬ論理と實際とはないので、要するに出鱈目です。

「先生、その事ぢやありません、わたし達が斯うして生きてゐるのを、どうのかうのといふわけぢやありません、これから生きようとするもの、これから生かさうとするものに就て先生の御意見が伺ひたいのでございます」

「なに、これから生きようとする者、これから生かさうとするもの、そんなものが此の世にあるか知ら、この一枚看板の一張羅、生かさうと殺さうと、質屋の番頭の腕次第……」
 「また妙な緞帳臭いセリフが初まつたが、お雪ちゃんも存外それに引ずられませんでした」
 「つまり、何でございませぬ、これから此の世の光を見せようといふ親の立場になり、これから、此の世の苦勞を味はされようとする子といふものゝ立場になつて見てとございませぬ」

「ふん、成程、して見るてへと、母の胎内にある子の爲に、また、その胎内に子を持つ母の爲につてな事になるのかね」

「まあ、さうでございませぬ、最初に申上げたでせう、子を産むことは必ず目出たい事とされてゐますけれども——さういふ場合に本當の意味では、生れるが目出たいか、生む

のが目出たくないか——といふような理窟になりますか知ら」

「ぢや、かりに目出たくないとするとうどうだね」

「なら、いつそ、親として産まないのが善い事であり、子として産れないのが善い事ぢやないでせうか」

「はてな」

道庵は仔細らしく小首を傾げて

「はて、お雪ちゃん、お前さんの質問が、深刻なやうで上江りがし、上江りがしてゐるようで存外深刻でもあり、ちよつと、迷はされるがね、早い話が、結局、斯ういふ事になるんぢやねえか、どうも、さうなりさうだよ、つまり、お雪ちゃんの今の質問は論じつめると、子供が母の胎内にあるうちに、仰おほしまつた方が、子供の爲にも、母の爲にも幸福ぢやないか——斯う云つて質問されてゐるような事になるんぢやねえかね、わしや、どうも頭が悪い」

と云つて道庵はそのくわゐる頭を軽く二三べん振つて見せました。

「いゝえ、さういふわけぢやないのよ、先生」

「どういふわけなんだえ」

「母と子との幸福の爲には、産むといふことが犠牲になつてもかまはないぢやないですかと、わたしは考へてみたものですから」

「はて、母と子との幸福の爲には……産むといふ事が犠牲——さうだな、やつぱり、露骨に云つてしまつて見ると、子供を仰ろしちやつた方が安心幸福といふことになるんぢやねえかと質問されてゐるような気がするんだが、さて、お雪ちゃん」

さて、お雪ちゃん、と、こゝで道庵が馬鹿に大きな聲をしたものですから、お雪ちゃんが思はず眞赤になりました。

「さて、お雪ちゃん、お前さんの質問は、いやに廻りくどく學者風になつてつめかけて來るが、詮ずる處、母の胎内から子を仰してしまふか、もちと露骨に醫者の方で云つてしまふと、墮胎をしてもいゝか悪いか——なほ一層現實的に云うと、問引いても、さしつかえ無えか、どうかといふ質問のやうに、拙者には商賣柄、さう受取れるが——さうなると外

科だね」

道庵はお手のものと云はぬばかりに、けろりと取り澄まして、べら／＼と次の如く語り出しました。

五十八

「さういふ問題は今更ら、お雪ちゃんから提出されるまでも無く、世間では、もう充分に研究も甄味もし盡されてゐて、今は不言實行の時代に入つてゐるんだよ——まあ早く云へば色々の意味で子を産みたくないといふ奴が、世間にはうんとゐるのさ、そりや、子を産みたくつて、産みたくつて神佛まで祈り立てる奴もあれば、子を産みたくなくつて、産まれようとする奴を、産ませまいとして、また産み並べた奴を持て餘してるのが、天下にうんとあるんだ——今更ら、お雪ちゃんのやうに、そんなに事新らしく婉曲に上品に持ち出すのが古い位なもんだが、この道ばかりは古いが古いにならず、新らしいが新らしいにならず、やつぱり、人間生きとし生ける間は繰り返されるんだ、だが、お雪ちゃんのやうに、

さう學問的に婉曲に持ち出す間は、まだ花で、不言實行となると、みもふたも無えのさ」

「不言實行とは、どういふ事なんですか」

「言はずして實地に行ふ、こいつが一番始末が悪いね——老子曰く、言ふ者は知らず、知る者は言はずつてね、斯ういふ貧乏人に引かゝると、全く始末が悪い、今の問題で云うとその不言實行、お産の方で、今の不言實行て奴が……」

「それがどうなんですか」

「言はずして行ふといふ奴が、一番始末が悪いさ、宣傳屋や、見榮坊なら直ぐにそれと當りがつくが、不言實行といふ奴になると、何處でどうして、何をしてゐるか、一向わからねえ、お産の方で云つて見るとだね、この不言實行て奴は……」

「それが、どうなんですか」

「つまり、闇から闇といふ奴でね——實行方法としては、今のその墮胎と問曳ひきといふ奴なんだ、お雪ちゃんと言論でもつて、只今頻りに拙者に挑みかけてゐる問題が、隠れて天下一に堂々と實行されてゐる、これがつまり、墮胎と問曳といふ事なんだ」

「どういふ風にして、その墮胎と問曳とやらが實行されてゐますか、これをお伺ひすることは出来ませんか」

「おや」

「先生、さういふ事を伺うのは失禮でございませうか」

「失禮なことだねえ、淑女の前で、さういふ事を口走る、こつちの方が失禮かも知れねえが、研究の心で、さういふ事を先輩にたづねるのは失禮といふ話にはならねえ、まして醫者に向つて、さういふことをたづねるのは、餅屋へ餅を買ひに行くのと同様、極めて自然にして、穩當なことなんだから、遠慮なくお尋ねなされるがよい」

「ですけれど、先生、たつた今、おや！とおつしやつて、ちよつと怖い目をなさつたぢやありませんか」

「は、は、は、あれは、ちよつと眼を睜はつたといふだけなんだ、お雪ちゃんといふ子が存外、眞剣に、その不言實行の實行方法まで立ち入つて、たづねて来たから、それにちよつと、面めんくらつたよけのものなんだ——なあに研究的に聞いて置く分にや、何でもなさいさ、

つまり性の教育なんだからね、處で……」

三七八

「え、わたしも、そのつもりで、大膽におたづねしてゐるのですから、あつかましい奴とおさげすみなさらずに教へていたゞきたうございます、世間では今、おつしやる通り、闇から闇といふことを罪惡のやうにも教へてゐますし——また、わたし達の疑問からして見ますと、その闇から闇といふのが、いつそ辛い日の目を見せて生かすよりは大きなお慈悲ではないかといふ問題に出會つてゐるのでございますから、その實行——つまり、先生のおつしやる不言實行だつて、さう一圖に罪惡呼ばはりをするのは、どうかと思はれるぢやありませんまいか」

「成程——理窟に兎に角として、その子を卸ろすこと、つまり墮胎なんだね、その墮胎も間引きも、滔々として不言實行されてゐることは事實なんで、また考へようによると、斯うして、まあ、徳川の天下が三百年も、とも角、無事で來てゐるといふのも、見ようによれば、その不言實行が……」

五十九

そこで、道庵先生は自分の體驗からして書き出しました。

「わしは、今でも斯ういふロクでなしたから、抑々此の世に生れ落ちる最初から、このクダでなしの運命を持つて生れて來たもので、わしの母親といふ奴が道庵を産む位のやつだから、どぶろくを飲むと夢みて孕んだわけでもあるまいが、こいつの生れるのを厄介がつて、何でも、あとで懺悔話に聞くと、今度産れやがったら、ひねつて呉れると云つて待ち構へてゐる處へ産みつけられたのが此の道庵だ、母親が、つまりおつかアが、この野郎と云つて自分の胎内から出たところを自分の手で、とつゝかまへて、もろにひねり殺さうとしたんだが、そこは、道庵を子に持つ位の母親の事だから、やつぱり、今云つた鬼心佛手といふ奴で、心では、この餓鬼をおつびねくつて呉れやうと待ち構へてゐたんだが、手が云ふ事を聞かぬえで、とう／＼、あつたらことに、道庵の一命を助けて此の世に送り出したばかりに天下の不祥を引き起して、今日此の通り人生かきを穰がせるやうになつたの

でげす、つまり道庵のおつかアが、此のロクでなしを問引きそこねて此の世に送り出したわけなんだが、この間引くといふ奴に目口を抑へる奴もあれば、灰を持つて来て口の中へ頬ばらせる奴もある、鶏をつぶすやうに手つ取り早く、首根つ子をおつびねくつてしまふ奴もある、道庵なんぞは、その手つ取り早い奴で、すんでの事にやらかされやうとしたのを、今助かつて今日此の通りの太平樂といふ廻り合せなんだ、何が幸になるか知れたもんぢやなねえ」

斯ういふ事を聞かれもしないのに、べらくと喋べつて、喋さないでもいよおふくろと自分の恥を曝らしてしまつたのも、酒のせいでもあり、相手が相手だから無難だとも見たからでもあると思はれます。

本来、道庵先生、道庵先生で通つてゐるが、今だに誰れも、その出處來歴を知つた者は無く、自分も江戸ツ子だと云つて、啖阿は切るけれど、一體江戸の何處で生れたんだか、その本姓も、本名も年齢も知つた者はない、大菩薩峠發表以來三十年にもなん／＼とするけれど、未だ曾て、道庵先生の身寄だと云つて、訪ねて来た人も一人も無いでせう。

それほど、出處來歴の不明な道庵來生が、このまゝにして置けば、出處來歴の不明そのものが、やがて、神祕的に衣ころもをかけられて、勿體もつけば箔も附くべきものを、よし無い處で、云はでもの事に口を辻らせ、曝さらさでもの恥を曝らす事になつたのも淺ましい次第ですが、併し、この告白も可なり割引をして聞かないと、前の落し話同様思はぬところで、種が破れ、底が割れないといふ限りはありません。

お雪ちゃんも、もう、數刻の談話でその邊の呼吸が少し呑み込めたと見え、さして人見知りをしないやうになりました。

その邊で、また道庵先生が一轉して、墮胎や間引きの悪い風儀を罵りながら、その口の下から、徳川幕府が斯うして三百年も日本の國を鎖ざしてゐながら、人間が此の國に溢れ返りもせず、人口過剰の爲に、亂民が出来たり食糧不足が生じたりすることが、部分々々には多少無かつたとは云へないけれども、大體に於ては、無事に三百年を経過して来たといふものは、蔭に此の墮胎や間引くことの不言實行が行はれてゐて、さうして、おのづから人口調節になつたのだといふ人の説と、これも亦一理あつて、人間は鼠ねづをつかまへて鼠

算だの何のと愚弄嘲笑するけれども、人間それ自身の殖え方が鼠には負けない事、殖えるまゝに殖やし、生まれるまゝに生ませて置けば三百年どころではない、三十年五十年で二倍にも三倍にもなつて、忽ち此の島國は人間で蒸れ返つてしまふ——そこで徳川三百年の間大して人口に増減がなく調節されて來たのは、この暗から暗の不言實行が到る所に行はれてゐた結果だといふ説と、それから、今まではそれで宜かつたが、これから開國といふことになつて見ると、日本人も、どし／＼外國へ行かなけりやあならないのだから、人間をうんと産み殖やせといふことになるだらう、さうなると、これからの時勢は、右の不言實行の法度が厳しくなる!

といふやうな事まで、發展だか、脱線だか知らないけれども、道庵がお雪ちゃんの爲に語つて聞かせました。

併し、お雪ちゃんは、どうも、さういふ政策問題には觸れて行きたがらないで、やゝともすれば、元へ元へと話を引き戻したがつてゐる氣色は明らかです。

「先生のおつしやる處を伺つて居りますと、子をおろすとか、間引くとか云つたやうな行

ひが、大さう悪いことのやうにも聞こえますし、また、さうでもない事のやうにも聞こえますが、一たい、どちらなんですか」

「お雪ちゃん、お前さん、また何で、それが善い事か悪い事か、そんなに氣にかけなさるんだい——どつちだつて、お雪ちゃんなんかの知つた事ぢやない」

「でも、先生は、さういふ事を心得て置くがいゝと教へて、こゝまで、わたしを教へ導いて下さつたのぢやありませんか」

「心得て置くがいゝつたつて、お前、程度といふものがあらあな、この邊でいゝよ、この邊で打ち切つちまはうよ、面倒臭いから」

「いけません、先生、すでにお話し下さらないなら格別、もう、こゝまでお話し下さつて、こゝでやめしまつては、本當の教育にはなりませんね、却つて、人に煮えきらない疑問を持たせて毒になりますから、わたしは承知致しませんよ、わたしが承知しましても、わたしの研究心が満心しませんから」

「こいつは六つかしい事になつた、お雪ちゃんの逆襲だ、こいつはたまらねえ」

「わたしは、心ゆくばかり伺つてしまはなければ満足しない病があるんでございます、こんな機会に、又とない先生から伺つて置かなければ、生涯の大事な學問をしそなつてしまひます」

「驚いたね、斯うまで逆にとつちめられようとは思はなかつた、斯うなると、道庵も、もう後ろは見せられねえ、何でも聞きな、あけすけに——矢でも鐵砲でも持つて來い」

急に力み出して、啖呵を切つたものですからお雪ちゃんがまた笑ひ出して、それでもこの機を外さないように、拔目なく問題を持ちかけてしまひました。

「では伺ひますが、先生、お江戸には中條ちうでうつてお醫者があるさうぢやございませんか」

「なにチウデウ——そんな醫者は知らねえ、そりや澤山の籤やぶの中には、そんな筈もあるかも知れねえが一々姓名は覚えちやゐられねえ、チウデウ——おいらの近づきにや、そんな……待ちな、あゝさうか、中條ぢやねえ、ナカデウだらう、中條と書いて中條なかつでうと讀んでもれえてえ、あれだらう、字は同じなんだが」

「そんならナカデウですか、あれは何をするお醫者なんでございますか」

「驚いたね——中條といふお醫者は何をするお醫者さんだと、年頃の娘さんから赤い面もしないで……反問されようとは豫期してゐなかつた」と道庵は、眼をギロ／＼させて、氣味の悪いほど、しげ／＼とお雪ちゃんの面をながめましたから、その時に、はじめてお雪ちゃんが少々恥かしい氣になりました。

「お雪ちゃん」

道庵は、とぼけたやうな、とぼけないやうな面をして、とろりとお雪ちゃんの面をながめながら

「お雪ちゃん——お前さんは」

「先生、そんなに、わたしの面ばかり御覽になつてはきまりが悪うございます」

「いゝんや、こつちが却つて面負けなんだ、だが、お雪ちゃん、しつかりしなくちやいけねえぜ」

「何をでございます、先生」

「何をつたつて、お前さん、見かけによらねえ白無垢しろむく鐵火てつ火だ」

「何でございますか、それは」

「お前は、今まで、鎌をかけ、この道庵から、絞り出さうとたくむ敵は本能寺にあることがよくわかつた、全く小娘と小袋は油断が出来ねえ——」

「否、何も、わたしは、たくんで先生から物事を承はらうとも致しません」

「致さないことがあるものか、お雪ちゃん、お前は、さい前から、この酔っぱらひを、舌の先きで遠廻しに操つて、この道庵の姦姑頭から絞り出さうといふ智慧は、つまり子をおろす方法と、それから子種を流すにいゝ薬でもあつたら、それをたぐり出さうと斯ういふ策略なんだ、わかつた、全く油断が出来ねえ、お雪ちゃん、お前といふ女は雪のやうに白い女だか、もう泥のやうに眞黒くなつてゐるんだか、そこるところを、これから拙者が見届けて、それからの挨拶だ、人間といふ奴は、浮つかり信用すると一杯食はせられる」

「まあ、酷い——先生は何といふヒドい邪推をなさるお方でせう、御自分で、わたしを教育して下さるとおつしやりながら、さうして聞くは一時の恥、聞かぬは末代の恥だから、何でも先輩に向つて、先輩を困らせるほど質問をしなければ、學問は進歩しないなんぞ

と、おつしやりながら、わたしが順々に質問を進めて参りますと、もう、そんな亂暴な事をおつしやる——」

「うむ——わからねえ、お雪ちゃんといふ子もわからねえ子だ、こつちが降参したくなつちやつた、ムニヤク——」

道庵は早蕨のやうな手つきをして盃を高くさし上げた姿を見ると、身ぶりこわ色でこまかさうとするものゝやうにも見えるので

「先生は、卑怯なんでしょうね、もし、その上、わたしが、では子を飼ふる仕方はどう、またそのいゝ薬があつたら教へて頂戴と、本當に切り出したら、どうなさいます、それから、間引くといふのは、どんな事か、その仕方や實例なんぞを擧げて教へて下さいと伺つたら、どうなさいます、ごまかしたつていけません、わたしはこれでもすべて物事に徹底しないと、やめられない學問の癖があるのでございますから、途中でおやめになつては罪です、わたしが許しません、先生らしくもない」

お雪ちゃんに斯う浴びせかけられると、道庵がまたムキになつて力み出し